

# 九州大学総合研究博物館年報

Annual Report of the Kyushu University Museum

第3号

2007年度-2008年度



2009年9月

九州大学総合研究博物館  
The Kyushu University Museum

## はじめに

九州大学総合研究博物館館長 松隈明彦

2009年度は、九州大学総合研究博物館が創設満10年を迎える節目の年である。大学院大学化、キャンパス移転、国立大学の大学法人化という大きな状況変化の中で、九州大学総合研究博物館は名古屋大学博物館とともに、東京大学総合研究博物館、京都大学総合博物館、東北大学総合学術博物館、北海道大学総合博物館に次ぐ全国第5、6番目の大学博物館として誕生した。博物館の創設以来、学内に蓄積された学術標本の実態調査と整理・公開、大学の教育・研究を社会に紹介する展示活動（公開展示、平常展示、サテライト展示など）、大学教育（学芸員資格関連科目、学部・大学院教育）、社会教育（公開講演会）、博物館資料・施設を使った研究とその支援など多岐にわたる活動を行ってきた。

この間、「新しい大学博物館を考える会」の提言（2003年）、「外部評価」（2006年）により、大学博物館のあり方についての外部識者の意見を聞くとともに、毎年開催される大学博物館等協議会に参加して、各大学博物館の活動と直面する諸問題について、他大学博物館と情報を共有する努力を重ねてきた。そこから、大学博物館が高度な専門家を擁しながら、地域に密着し、地域に開かれた「博物館」であって欲しいという要望と、大学博物館は一般博物館と一線を画した教育・研究に専念する「大学博物館」であるべきだという理念の違いが見えてきた。また、全国の大学博物館の専任教員には、博物館経営、博物館教育、展示等の研究者がほとんどいないという現状も浮彫りにされてきた。

創設以来、九州大学総合研究博物館は十分な展示や標本収蔵のスペースを備えた博物館の建物を持たないために、福岡空港や福岡市博物館、福岡市少年科学文化会館、九州国立博物館等の協力を得て、大学の教育と研究を社会に知らせる公開展示・サテライト展示を行ってきた。2012年度から実施される改正博物館法施行規則では、現行の学芸員資格関連7科目が9科目に整理・拡充され、単位数も12単位から19単位に大幅に増加する。これに対応するためには、これまで以上に学内他部局、他大学、他博物館との連携・協力が不可欠である。このような状況の中で、新キャンパスへの移転が進行し、博物館に移管される資料が増大した。2008年度からは、旧工学部本館に常設展示と収蔵のスペースを確保して、九州大学各部局が所蔵する学術標本のナビゲーション展示と標本の収蔵を開始したが、標本資料の保存、整理と、教育・研究への活用のためには新キャンパスでの博物館建設が急務である。

九州大学総合研究博物館は、大学が所蔵する学術標本の保存と教育・研究への活用、及び学術標本に基づく研究という大学博物館設置の基本理念の下に、全国横並びの大学博物館を目指すのではなく、九州大学の歴史と地理的な位置に根ざした独自の大学博物館を目指すべきである。今回作成する2007、2008年度年報が、地域連携・社会貢献が求められる社会情勢の中で、中期目標・中期計画に掲げる博物館の理念と博物館に対する社会的要望の調和を図り、九州大学総合研究博物館の進路を議論するための基礎資料となることを希望する。

# 目 次

## I. 博物館の2007～2008年度の活動—総括と分析—

- 1 教育に関する目標を達成するための措置 ..... 4
- 2 研究に関する目標を達成するための措置 ..... 7
- 3 その他の目標を達成するための措置 ..... 12

## II. 組 織

- 館長 運営委員会委員 研究部 事務部 ..... 15
- 資料部 フィールド・ミュージアム部 協力研究員 (2007年度) ..... 16
- 資料部 フィールド・ミュージアム部 協力研究員 (2008年度) ..... 17

## III. 事 業

### 1. 開 示—展 示—

- A. 公開展示 ..... 18
- B. 特別展示 ..... 19
- C. サテライト展示 ..... 20
- D. 常設展示 ..... 22
- E. 平常展示 ..... 22

### 2. 開 示—情報発信—

- A. インターネットミュージアム ..... 23
- B. 所蔵標本データベース ..... 23
- C. 出版・広報 ..... 23
- D. 新聞等による報道 ..... 23

### 3. 教 育

- A. 大学教育 a. 学芸員資格関係 b. 学部教育 c. 大学院教育 d. その他... 24
- B. 教育支援 ..... 25

### 4. 研 究

- A. P & P 研究「九州大学博物館展示を利用した実践的研究  
—アウトリーチ活動のあり方と、大人と子どもの関わりを促すツール開発—」 ..... 26
- B. 全国大学博物館等協議会・博物科学会 ..... 30

5. 収蔵管理	
A. 移管標本・資料	32
B. 受贈標本・資料	32
C. 標本整理・データベース化	33
6. 社会貢献	
A. 公開講演会	34
B. コミュニケーションミュージアム事業	34
IV. 専任教員の研究活動	
岩永 省三	36
中牟田義博	37
松隈 明彦	38
中西 哲也	40
宮崎 克則	41
三島美佐子	42
丸山 宗利	43
V. 施設	
旧工学部本館	46
第一分館	47
第二分館	47
記念講堂	47
VI. 規則	
九州大学総合研究博物館規則	48
九州大学総合研究博物館の教員組織に関する内規	50
九州大学総合研究博物館資料部内規	50
九州大学総合研究博物館フィールド・ミュージアム部内規	51

※ 本書の編集は岩永省三が行った。

※ 表紙デザインは福原美恵子が行った。

# I. 博物館の2007～2008年度の活動—総括と分析—

博物館が大学に提出した中期目標・中期計画に則って、項目ごとに2007～2008年度の活動実施状況を概観し総括しておく。必要に応じて、2006年度以前の状況にも触れることとする。

○は中期計画として掲げた事項、◎はそれぞれの事項について、この2年間の実際の活動状況、およびその分析結果である。

## I 大学の教育研究等の質の向上に関する目標を達成するために取るべき措置

### 1 教育に関する目標を達成するための措置

#### (1) 教育の成果に関する目標を達成するための措置

##### 1) 学士課程

- 博物館専任教員は、各自の専門に沿った学部の兼任教員として、本務に差し支えない範囲で、講義、実習に積極的に関与する。
- ◎ 博物館専任教員は、各自の専門分野に関する理学部・農学部・文学部の兼任教員として、講義・実習を担当した（詳細はp24）。これは博物館教員が各自の専門分野での研究成果を学部学生の教育に反映させて、教育現場との関わりを維持していく上で重要な業務である。各学部で学生の教育にかかわる中で、現在の学生の知的状況を把握し、大学博物館の教育への活用法を考察する良い機会となっている。

学芸員の養成については、全専任教員が理学部を開講部局とする学芸員資格関連科目の講義・実習を担当するとともに、文系教員は文学部開講の学芸員資格関連科目の講義・実習の一部も担当した。これは将来学芸員となる人材の養成に留まらず、博物館一般あるいは学術標本・文化財に対する理解・愛着を有す人材を少しでも多く社会に送り出す上で不可欠な業務であり、学生の関心を深めることに寄与している。

これら業務を今後も継続するとともに、日常的な博物館活動の成果を反映させつつ学生の興味関心を引き出す工夫を重ねる必要がある。

##### 2) 大学院課程

- 博物館専任教員は、専門に沿った学府の兼任教員、或いは協力講座担当教員として、本務に差し支えない範囲で、大学院教育に積極的に関与する。
- ◎ 理学府の協力講座「地球惑星博物学」を担当し、理学府の大学院生の指導に当たっており、07年度には博物館教員が参加する理学研究院地球惑星科学専攻のカリキュラムについて、理学研究院の関連研究分野の教員と共同で内容・実施時期の検討を行った。また、博物館教員が兼担を努める比較社会文化学府の基層構造講座・地球資料情報講座で講義・演習を担当している（詳細はp24）。博物館教員は博物館職員としての業務以外に各自の専門分野の研究を遂行しており、その成果を大学院生の教育に反映させる場を持つことは研究の深化上でも有効に作用している。理学府・比較社会文化学府では、それぞれの学府における大学院生教育に不可欠の役割を担うに至っ

ており、今後も継続する必要がある。

- 標本資料を分析するための適切な方法論を持ち、実験・分析などの手段を通して、情報を適格に抽出できるよう教育する。
- ◎ 兼任教員として、理学府・工学府・農学府・比較社会文化学府の講義・演習を担当しており、その修正・改良に努めてきた。博物館の実験・分析を行うための施設・設備の整備が進むにつれて、それらを用いたきめ細かな教育が可能になってきている。07年度に旧工学部本館に移転したのを機に、08年度から標本資料の収蔵展示室を設け、実物を用いた教育環境を整備する作業に着手し、現在継続中である。
- 理論・学史・先行研究を総括して研究動向と問題を適切に抽出し、その中に自分の研究を適切に位置付け、オリジナルな見解を提示し、その集積を体系化できるよう教育する。
- ◎ 理学府・比較社会文化学府の博士課程（前期）の学生の指導を行っており、その修正・改良に努めてきた。大学院教育に必要な書籍類を順次揃えつつあり、07年度から旧工学部本館に図書室を設け利用しやすくした。

## (2) 教育内容に関する目標を達成するための措置

### 1) 教育方法に関する具体的方策

- 博物館施設、設備の開放、標本資料の貸出、展示の公開等により博物館資料を使った教育を支援する。
- ◎ 大型プリンターの開放、イベントパネルの貸し出しによる教育の支援を継続的に行っている。大型プリンターは教員・学生から学会発表資料等の作成での使用希望が年々増加しており、極力要望にこたえるようにしている。

博物館所蔵標本資料の利用希望に対処するため、標本資料閲覧要綱（18年度制定）・標本資料貸与要綱（19年度制定）を定め、骨格標本については両要綱に則って閲覧や貸与を開始した。閲覧・貸与・写真掲載などの希望は年々増えつつあり、骨格標本以外の館蔵資料の増加につれてますます増えると予想される。それらに対応する体制の整備が今後の課題である。

展示の公開は博物館として不可欠な業務であり、開設以来、50周年記念講堂2階の常設展示室を公開してきたが、展示公開施設が乏しい状況から脱することができずにきた。06年度以降ようやく展示を増やせるようになってきた。

06年度に旧工学部知能機械工場建物（2008年1月に第一分館と改称）の2階に開設した骨格標本室を07年度・08年度には開学記念行事・公開講演会等に合わせて公開するとともに、外部からの依頼に応じて適宜公開した。07年度には同建物の1階に自然史資料室（高壮吉鉱物標本など）を移し博物館への移管はまだであるが公開を開始した。08年度には同建物1階に六本松地区図書館から旧玉泉館考古学資料を移し、公開へ向けての準備を開始したことから、同建物は今後ますます教育のための使用頻度が高まると予想されるが、この建物が通常無人であり、保安上の難点があることから、常時公開できないことが問題である。

07年度に利用が認められた旧工学部本館3階に、19年度末から20年度にかけて常設展示室・収蔵展示室を整備し、08年度から公開を開始し、芸術工学研究院による演習の場として提供したほか、NPOによる「科学の公園」事業に協力して展示室を公開した。このように06年度以降着実に施設・設備・展示の公開を進めており、今後さらに質の向上をはかっていく必要がある。

○ 論文発表会の開催を支援する。

- ◎ 博物館の展示場と展示用具を他部局の論文発表会に貸し出し、有効に活用して頂く事での教育支援を目指している。02 から 04 年度まで農学部農学分野の公開卒業論文発表会の開催を支援したが、05 年度以降、博物館運営委員会を通じて全学へ向けて卒業研究発表会の募集を行ったが応募がない状況が続いている。今後も継続するかどうか再検討の必要がある。

○ 博物館の施設、設備を充実させる。

- ◎ 伊都キャンパスへの移転まで新しい博物館建物の建設が望めない状況が続くことは、当博物館にとって深刻な問題である。当面は、箱崎キャンパスにおいて暫定的な施設を少しでも多く獲得し、展開可能な博物館活動を拡大する努力を続ける必要がある。

施設については、創設以来 5 年間、旧工学部図書館建物の教員室、50 周年記念講堂の展示室・標本整理室以外に施設が増やせない状況が続いていた。特に標本収蔵施設を持たないことは、学内各部局等の標本の移管、学内外からの標本の寄贈を困難にし、博物館にとって致命的な弱点となっていた。ようやく 05 年度に工学部の移転に伴って、約 2000 m<sup>2</sup>の旧知能機械工場建物を博物館施設として獲得し、その 2 階に骨格標本室、同建物 1 階に工学機械収蔵室を設けたのに続いて、07 年度に同建物 1 階に自然史資料室を設けた。08 年度には同建物 1 階に玉泉館資料展示室および、故岡崎敬先生旧蔵資料・書籍類収蔵室を整備した。

07 年度に旧工学部本館建物において合計約 925 m<sup>2</sup>の部屋の使用が認められ、08 年度にかけて教員室・会議室・展示準備室・実験室・書庫・標本整理室を整備し、08 年度には階段教室を改造して常設展示室を開設した。また同建物 4 階会議室を当館管理下に移して展示室とした。

また 07 年度に旧工学部 4 号館建物に 730 m<sup>2</sup>の部屋の使用が認められカルテ資料収蔵室とした。このように状況改善の努力は少しずつ成果を出しつつある。今後もこれらの施設を十分に機能させるよう努めるとともに、施設獲得の努力を続ける必要がある。

設備については、博物館が研究・研究支援・教育・教育支援を行う上で不可欠である。20 年度には生物系標本整理室に殺虫用の超低温冷凍庫を設置したが、今後も機器類の整備を続け、学生・大学院生の研究・教育への活用という本来の目的に沿った活用を図る必要がある。

(3) 学生への支援に関する目標を達成するための措置

1) 学生への学習支援に関する具体的方策

○ 博物館資料の情報を提供し、学生の勉学を支援する。

- ◎ すでに博物館に移管された資料のみならず、九大全学の学術標本の情報化を推進して提供し、学生の勉学に役立てることは大学博物館の重要な使命である。07・08 年度にも標本資料データベースの充実を推進し、博物館ホームページ、研究報告、博物館ニュースを通じ情報を提供した。

実物資料の教育への活用として、07 年度には自然史資料室の高壮吉鉱物標本、08 年度には常設展示室の展示物を、学部生・大学院生の教育用として活用し始めた。このほか 08 年度には、六本松地区図書館から旧玉泉館考古資料を第一分館 1 階に移して公開の準備を始めたほか、旧工学部本館建物については、昆虫整理室に、寄贈を受けた佐々治標本・大塚標本・村井標本、および六本松地区から移動した鳶標本を収蔵した。化石標本室には六本松地区から移動した小池標本を収蔵した。植物標本室には学内に散在している標本棚の一部を移設し、最近の証拠標本および東京大学から寄贈された標本を収蔵した。液浸標本室には液浸魚類標本を収蔵した。これらも順

次、学生の教育に供する予定である。今後、データベースについては公開件数をさらに増加させ、実物資料については公開場所の獲得と展示・活用方法の研究・改善に努める必要がある。

九大全体の所蔵資料の量に比べると、提供が可能になった情報量はまだ多くはないが、継続的に実施し、提供量の増大を図る必要がある。これらを博物館職員が教育に活用するだけでなく、学内の各部局に積極的に情宣し、学際的活用を促していく必要がある。

このほか08年度に、国内外の昆虫学・植物学・考古学関係図書等の寄贈を受け、また研究費より博物館学関係の図書を購入して図書室に配架し、学生の勉学に供した。

- 博物館建物の建設に際しては、学部学生、大学院生のために研究の便宜を図るスペースを確保するよう考慮して設計に当たる。
- ◎ 伊都キャンパスへの移転まで新しい博物館建物の建設が望めない状況が続くために、当面は、箱崎キャンパスの博物館施設に学部学生・大学院生の勉学のためのスペース確保を続けている。08年度には旧工学部本館3階に、学生教育用の研究室・ゼミ室を設け、顕微鏡などの教育機器を設置し学習図書を配架した。第一分館2階の研究室および50周年記念講堂3・4階の一部を学生の研究・教育用に整備した。生物系標本整理室には、作業台・椅子を配し、研究・教育・ワークショップなどに活用できるように整備した。これらを教育に有効利用するとともに今後もスペースの充実を図る必要がある。

## 2 研究に関する目標を達成するための措置

### (1) 研究水準及び研究の成果等に関する目標を達成するための措置

#### 1) 目指すべき研究の方向性

##### ○ 他大学との研究情報交換システムを確立する。

◎ 大学博物館は、各教員の個人的研究テーマとは別に、大学博物館固有の課題と研究分野を持つ。それらの多くは他の大学博物館と共通しており、各館が別個に取り組むだけでなく、実践例やその結果などについて大学博物館相互で情報交換を行うことによって、研究を活性化していくことが有効的である。また情報交換は単発的でなく、システムを確立して持続的に深化していく必要がある。

そのため、04年度以降毎年、国立大学博物館等協議会（18年度以降、大学博物館等協議会と改称）・同館長会議・全国博物館長会議に出席し意見交換・情報収集を行い、情報交換会議の必要性について議論してきた。このような大学博物館どうしの問題意識の共有を背景として06年度に博物科学会が設立され、年に一回の大学博物館等協議会大会と同日に学会形式で課題への取り組みを研究発表する場ができた。07年度には九州大学で大学博物館等協議会2007年大会・第2回博物科学会を開催し、08年度には、大学博物館等協議会2008年大会・第3回博物科学会に参加し、様々な問題について議論を深め他大学との情報交換会に努めるとともに、館長会議・実務者会議・協議会総会において情報交換会議の必要性について議論した。当面は博物科学会に積極的に参加することによって、同学会を研究情報交換システムとして熟成させていくことが望ましく、当館が主導的役割を果たせるように努力する必要がある。

- 博物館に複数の学問分野の教員が共存する利点を生かし、異なった分野間で情報交換、及び共同研究を行い、標本資料に基づく新たな境界領域・研究分野を開拓する。

◎ 当博物館の利点を活かした学際的共同研究は、博物館の設立当初から必要性を認識しており、徐々に共同研究の幅を広げつつある。08年度には、博物館教員・資料部教員が互いの専門分野への理解を深めるために月1回の頻度で「博物館談話会」を実施し研究発表を行った。また、博物館展示室の展示資料の活用方法の研究を博物館職員共同で行い、子供向け活用補助ツール開発とその評価を行った。このほか、07・08年度には軟体動物学、植物学を専攻する博物館教員が、共同研究の計画を立て、科学研究費補助金（基盤C）に応募した。フランスの研究者とオマーンの新石器時代の遺跡から出土した二枚貝の新種の記載を進めている。韓国の研究者と日本の陸生貝類の起源を考えるため、朝鮮半島で野外調査を行った。今後さらに文科系・自然史系を横断した学際的共同研究を目指して、積極的な働きかけを行う必要がある。

○ **博物館を核として、標本資料に基づく全学的規模の学際的共同研究を行う。**

◎ 06年度に三島助教を中心とする、人間環境学研究院教授・芸術工学研究院教授・USI 学術研究員との共同研究「九州大学博物館展示を利用した実践的研究—アウトリーチ活動のあり方と大人と子ども間の関わりを促すツール開発—」がP&Pに採択され、07年度から開始した。07年度には6回のセミナーを実施し、学外から講師を招聘してさまざまな博物館教育の実践事例を学習するとともに、夏の公開展示を利用した学術調査を行った。08年度には、学内外から講師を招聘した7回のセミナーと4回のワークショップを実施し、さまざまな事例を学習するとともに、展示室における現地調査とアンケート調査による学術調査を行った。

当面この共同研究を着実に遂行するとともに、この研究で形成された人的ネットワークを基礎に共同研究をさらに展開し、将来の九大博物館での実践プランを立てる必要がある。

2) 成果の社会への還元等に関する具体的方策

○ **研究紀要、資料集を発行し、博物館の研究活動を社会へ還元する。**

◎ 02年度から「九州大学総合研究博物館研究報告」を毎年1号ずつ定期的に発行し、博物館の研究活動を社会に還元するとともに、九州大学が収蔵する標本資料の情報を発信している。07年度に第6号、20年度に第7号を発行し、研究機関・研究者・他博物館等に配布した。

博物館教員それぞれの専門分野の研究成果については各分野の学術誌に発表できるが、多様な博物館活動に関わる研究成果の発表が可能な場として「研究報告」は重要かつ不可欠な役割を果たすに至っている。今後も継続的な刊行を目指して努力する。

○ **博物館が所蔵する標本資料のデータベースを作成し、インターネットを通じて社会へ公開する。**

◎ 16年度以降、博物館ホームページを通じて、標本資料のデータベースを公開しており、07・08年度には資料部を構成する様々な分野にデータベース化推進経費を配分して標本資料の整理を促進し、その成果として標本資料データベースをさらに充実させた。学外からのアクセスも多く、学界に多大の寄与を果たすに至っているのに加え、来るべき新キャンパスへの移転時に他部局から当館への標本類の移管・移動が本格化することから、さらに速度を速めて標本資料の整理とデータベース化を進める必要がある。現状では、分野によって整理およびデータベース作成の進捗状況に遅速が出ていることから、博物館教員が的確に仲介して事業を推進する必要がある。

○ **年報、ホームページ、博物館ニュース、紀要等を通じて博物館活動の状況を社会に公開する。**

◎ ホームページ（毎年更新）、博物館ニュース（年2回）、研究報告（年1回）、年報（2年に1回）、の充実を通じて博物館活動を社会へ公開している。研究報告はweb版をホームページに掲載し研究者に便宜を図っている。刊行物は、市内小中高等学校など教育機関、行政、国内の大学博物館

等関係機関、講演会参加者等に配布した。

07・08年度にはホームページの充実を図った。07年度に博物館ニュース第9号・第10号、研究報告第6号を刊行し、博物館概要・博物館概要英語版を更新した。08年度には博物館ニュース第11号・第12号、研究報告第7号を刊行するとともに、公開展示「奴国の南」に際して図録を製作し来場者・研究機関等に配布した。

ホームページでは、博物館の概要や行事予定とともに、過去の展覧会の説明パネルやデータベースを公開し、年々充実度を高めてきた。博物館ニュースでは学術的内容を一般向けに分かりやすく解説する読み物を中心とし、研究報告は博物館教員の研究成果を主とする。年報では博物館の多様な活動を網羅的に概観している。これらの出版や更新は現在の所軌道に乗っており、内容の更なる充実に努める必要がある。

## (2) 研究実施体制等の整備に関する目標を達成するための措置

### 1) 研究者等の配置に関する具体的方策

#### ○ 資料部及びフィールド・ミュージアム部の協力教員制度の充実を図る。

◎ 九大が所蔵する学術標本は750万点を越え、博物館の専任教員7名だけでは、管理・収蔵・保管・研究など対応は不可能であり、学内の各部門・分野の協力教員制度を充実する必要があることは言うまでもないことから、資料部及びフィールド・ミュージアム部の協力教員制度の充実を図ってきた。資料部については、工学機械類・医学部附属病院カルテ類など、博物館が扱う資料分野が増加するたびに、新規に協力教員の増加を図っている。また教員の定年などに際しては速やかに後任を決定するようにしている。(詳細はp16・17)

フィールド・ミュージアム部については、06年度にその必要性について教員会議で議論を始め、07年度に英彦山の施設を利用した昆虫の野外観察の計画を立案した。08年度にはフィールド・ミュージアム部の立ち上げに備え、学振の「ひらめきときめきサイエンス」事業を活用し英彦山の施設を利用した昆虫・植物・陸貝・岩石の野外観察会を実施した(p51写真)。今後、関係施設と連絡をとり、活動内容や協力研究員へのフィールド・ミュージアム部参画の呼びかけ、事故・災害への保証・対応を検討し、活動を具体化する必要がある。

#### ○ 学外の研究者、名誉教授等を対象とした協力研究員制度の充実を図る。

◎ 04年度以降毎年、協力研究員の充実を図っており、07・08年度も協力研究員の充実を図り、資料整理、資料に基づく研究に協力してもらっている。08年度にあらたに専門研究員制度を立ち上げ、数名を受け入れ、専任教員とともに研究を実施している。18年度まで協力研究員用の作業室は記念講堂4階の狭隘な部屋しかなかったが、07年度後半に旧工学部本館建物に分野別の標本整理室を獲得できたので、余裕を持った空間で作業してもらえるように08年度から設備面の整備を進めている。

### 2) 研究環境の整備に関する具体的方策

#### ○ 教員研究室・実験室を整備する。

◎ 創立以来狭隘な教員研究室・実験室しか持たなかった当館にとって、その整備は緊急を要する課題であった。04年度に部屋の要望(緊急的要望)、中期的建物の確保の要望を出し、05年度には工学部の移転が始まり残置していった技術史系資料を保存し、活用するために、博物館の過渡的施設整備について「要望」を作成し、標本室・展示室の獲得に努めた。05年度に医学部基礎研

究 A 棟に所在し比較社会文化研究院が管理していた古人骨・動物骨格標本が移転を迫られたために、比較社会文化研究院から当館へ移管手続きを行い、旧工学部知能機械工場を収蔵施設として獲得したのを契機に、同建物 2 階に資料調査室を設け研究・調査用としたが、教員室から離れている難点があった。06 年度に工学部移転後の空きスペースを確保するため要望書を提出し、07 年度に旧工学部本館建物に教員室（計 218 m<sup>2</sup>）、実験室（計 150 m<sup>2</sup>）を獲得し、08 年度にはその整備を進めた。09 年度から本格的に稼働させつつ、研究・実験のための環境をさらに整えとともに、将来の新キャンパスにおける博物館建物での研究環境の構想を練る必要がある。

○ 競争的資金の獲得を積極的に行う。

◎ 04 年度以降毎年、すべての専任教員が科学研究費補助金、その他の研究費補助金に応募している。また学内の P&P は、07 年度に三島助教を中心とする共同研究「九州大学博物館展示を利用した実践的研究—アウトリーチ活動のあり方と大人と子どもとの関わりを促すツール開発—」が採択された（2カ年）。そのほか、07 年度には 3 件の民間研究助成、08 年度には 3 件の民間研究助成に応募した。今後も地道に競争的資金獲得の努力を続ける必要がある。

○ 寄付の意識を高める運動を行う。

◎ 06 年度に大学博物館等協議会の機会を通じて、他博物館の博物館後援会について意見を聞いたが、07・08 年度まで着手できていない。07・08 年度には大学博物館等協議会等の機会を通じて、他博物館の博物館後援会について意見を聞いた。外部に寄付を仰ぐには、外部からの評価を受けるに足る、それなりの自前の施設の獲得と活動の蓄積が必要であり、今後の努力にかかっている。

○ 標本の同定・分析依頼に対しては内規を定め、料金の徴収を検討する。

◎ 06 年度に同定・分析依頼について料金を取ることにについて教員会議で議論したが、まだ具体的な規定案の検討には入っていない。今後の検討課題であるが、各種の分析を独自にこなすための設備・機器の充実を先行して図る必要がある。

○ 新キャンパスの博物館の設計に際しては、常設展示ができた後は入館料を徴収すること、博物館内にミュージアムショップを設け、図録、写真、絵葉書、図鑑など知的生産物の販売を行うことを検討する。

◎ 新キャンパスにおける博物館建設が具体化しておらず、08 年度まで着手できていない。過去の公開展示に際して製作した図録類はいずれも無料で配布しているが好評であり、06 年度に絵葉書の試作品を製作した。08 年度には将来の図録・写真集・絵葉書等の作成・販売を見据え、経験を蓄積するため、公開展示「奴国の南」展に際して、プロの写真家による写真撮影、水準の高い図録の作成を試みた。将来の販売に備えて、こうしたより良い知的生産物製作の経験・ノウハウを蓄積し続けることが重要である。

○ 光熱水費の節約を図る。

◎ 会議・講義等で部屋を離れる際は、こまめに消灯等に努めるようにしている。08 年度には旧工学部本館の常設展示室・収蔵展示室の高熱水費の節約のため、窓に断熱フィルムを貼った。旧工学部本館・旧工学部 4 号館・第一分館など、当館が使用する建物・部屋が増加すれば不可避免的に光熱水費が増加する。特に標本収蔵室は温湿度管理が重要であり、窓に断熱フィルムを貼るなどの対処療法では限界があり、将来的には空調設備を備えざるをえない。標本類は大学全体の財産でもあり、全学的な理解を得て新たに予算要求するなど方策を立てる必要がある。

○ 新キャンパスでの博物館建物の建設に際しては、省エネ型建物を目指す。

- ◎ 新キャンパスにおける博物館建設が具体化しておらず08年度まで着手できていないが、将来の建設に備えてより良い建物について研究しておく必要がある。
  - 新キャンパスでは、人の空間と標本の空間を可能な限り分離して、防虫等のための薬品の影響が人に及ばないように努める。新キャンパス移転後は、模式標本など貴重標本の収蔵・管理のため、標本庫の滅菌、殺虫消毒を定期的に行うが、薬剤による燻蒸を避け、冷凍による滅菌、殺虫を行い、博物館の職員、学生の安全を図る。
  - ◎ 新キャンパスにおける博物館建設が具体化しておらず08年度まで着手できていないが、将来の建設に備えてより良い方法について研究しておく必要がある。
- 3) 教育研究組織の見直しの方向性
- 一次資料研究系、分析技術開発系、開示研究系の業務内容の見直しや、系間の境界線の撤去を検討する。また、教員相互の連携を図り、縦割りシステムを改善する。
  - ◎ 現在の3系体制は、1990年代後半から大学博物館の設立が始まった際に、主要大学横並びで設置された経緯があり、より適当な体制を検討する必要は、常々議論してきた。04年度から研究と教育のほか地域連携・社会貢献を重要な柱の一つとする改組の検討を始め、06年度には各系の内容や系間の境界について教員会議で議論を始めた。これを受け、07年度には館の基本的使命（ミッション）の再検討を始め、08年度には改組に備えた将来計画会議を立ち上げ、ミッションを確認し、移転までの具体的活動計画を策定し、各系の内容や系間の境界についての議論を始めた。09年度以降に改組を具体化させていく予定である。
- 4) 研究の質の向上に関する具体的方策
- 博物館の設計に当たり、博物館資料のデータベース化を進め、内外の研究者へ向けた情報の発信を行うスペース、国内外の研究者との研究交流を発展させるスペースを設けるよう検討する。
  - ◎ 新キャンパスにおける博物館建設が具体化しておらず08年度まで着手できておらず、今後の検討課題であるが、将来の建物建設に備えてより良い設計について研究しておく必要がある。08年度には西日本自然史系博物館ネットワークによるデータベース研究会の実施をサポートし、他大学や他博物館の現状や問題点を認識することに努めた。
  - 事業計画、予算・決算、博物館活動報告等を載せた年報を作成し、学内、周辺の大学、高校、周辺市町村、県、国、関連機関等へ配布して、博物館活動への理解と協力を求める。
  - ◎ 07年度に「九州大学総合研究博物館年報第2号 2005-2006年度」を刊行し17・18年度の活動を報告した。08年度には年報の発行を行わず、21年度に2007・2008年度分をまとめて刊行した(本書)。今後も定期的な刊行と内容の充実を図る必要がある。
  - 入館者に対するアンケート調査を行い、博物館に対する要望、評価をこまめに受けると共に、定期的に外部評価を実施する。
  - ◎ 07・08年度に公開展示、公開講演会などに際してアンケートを実施し、参加者の要望の把握に努め、結果を分析し活動の改善に有効に反映させるよう努力した。また、P&P研究を通してこれまで登録されていた一般の方々を対象にアンケート調査を実施し、要望等を分析した。外部評価については、05年度に8名の外部評価委員による外部評価を受け報告書を作成した。外部評価委員からの意見は、当館の業務が多岐に広がり過ぎ、力を注ぐべき方面が手薄にならざるを得ない現状を指摘し、ミッションの再検討・絞込みを促すもので、今後の業務の見直しに非常に示唆的であった。今後4～5年に一度外部評価を受け、大学博物館の使命など基本的な問題について

議論し、現状の改善、将来の進路の検討に活用していくことが必要である。

#### 5) 施設設備の整備などに関する目標を達成するための措置

- **新キャンパスにおける博物館については、楽しみながら学ぶ、ゆとりある魅力的な設備を整備する。**
- ◎ 新キャンパスにおける博物館建設が具体化しておらず08年度までは着手できていない。今後の検討課題であるが、将来の建設に備えてより良い設備について研究しておく必要がある。
- **博物館の研究と教育研究支援業務を円滑に行うための分析機器の導入を図る。**
- ◎ 16年度まで分析機器の導入のため概算要求の申請を行ったが、05年度以降は標本庫・展示室の緊急の整備を図るため営繕工事の要求を行い、機器の導入のための概算要求は行わなかった。高額の分析機器の導入は運営経費の枠内では困難であり、05・06年度には他部局からの中古品の移管で何とかしのいだが、大学院生の研究・教育に利用できるようにはなっていない。今後も機器類の整備を続ける必要があるが、予算獲得の困難が問題点である。
- **保存環境に配慮した安全な標本庫と安定した標本の整理・管理システムを作り、民間等のタイプ標本を含む重要標本の寄贈、寄託に寄与する。**
- ◎ 当館は創設以来長らく自前の標本収蔵施設を持たず、安全な標本庫導入の余地がなかったために重要標本の寄贈・寄託に対応できなかった。重要標本が他館に収蔵された事例もある。05年度までは少量の標本のみを受け入れ、暫定的に50周年記念講堂の展示室の一角に保管してきた。06年度に開設した骨格標本室も空調設備を備えるに至っていない。07年度に旧工学部本館建物に分野別の収蔵展示室を獲得できたので、08年度には各整理室はUVカットフィルムを窓ガラスに貼り付け、空調を整備することによって紫外線に湿気による標本の劣化を防ぐ努力をした。09年度以降に保存環境をさらに整えるとともに、標本の整理・管理システムの構築に着手し、今後増加すると予想される標本の寄贈・寄託に備える必要がある。
- **科学研究費補助金等を利用して、東南アジアを始めとする国内外の学術調査を行い、標本の充実を図る。**
- ◎ 07年度は中島平和財団のアジア地域重点研究助成で採択された中国の研究者との共同研究により、中国内陸部での植物の学術調査を行うと同時に、現地の自生植物の標本を収集した。08年度には中国海洋大学から南海北部湾産のタマキガイ類標本の提供を受け、日本産類似種と遺伝学的な比較を行った。こうした地道な調査・収集を今後も継続する必要がある。

### 3 その他の目標を達成するための措置

#### (1) 社会との連携、国際交流等に関する目標を達成するための措置

##### 1) 教育研究における社会との連携・協力の推進方策

- **学内展示及び国公立博物館との共催の公開展示、サテライト展示を通じて、大学の研究、教育を社会に紹介する。**
- ◎ 各種の展示は、当館がもっとも時間と労力を費やし努力している事業である。  
公開展示では、07年度は「化石のヒミツ」展を福岡市立少年科学文化会館で開催した。08年度には埋蔵文化財調査室の協力の元に「奴国の南」展を九州国立博物館で開催した。公開展示は学内各部局の研究・教育の成果を展示・情報発信するものであり、借用する会場の主要来館者層

に合わせて展示の手法や説明の難易度を調整し、アンケートで感想や意見を回収するなど、将来の新キャンパスでの開館に備えて様々な試みを行ってきた。来館者の反応は概ね良好であったが、回を重ねるにつれて、次年度の担当部局・テーマ・開催場所を決定するのが容易ではなくなってきた。できるだけ早めに準備に着手し円滑に事業を進める努力が今後も必要である。

学内展示では、07年度は「九州大学教育・研究の最前線―第6回P&P研究成果一般公開―」、20年度に「九州大学教育・研究の最前線―第7回P&P研究成果一般公開―」を開催した。P&P展は記念講堂で開催しており、説明パネル主体で、内容が専門的であるために入館者が少ないのが悩みであるが、P&P採択研究の成果発表は継続する必要がある。このほか、07年度には「骨格標本室特別公開」、「九州大学所蔵自然史標本・資料の写真展」、08年度には「常設展示室」「骨格標本室」「貴重地質・鉱物標本」「中山平次郎先生関係資料」の一般公開を実施した。

サテライト展示は、03年度以前からの継続分として福岡空港、前原市立伊都文化会館、05年度から福岡市保険環境研究所「まもる一む福岡」、二丈町健康ふれあい施設「二丈温泉きららの湯」、志摩町総合保健福祉センターで展示を定期的に更新した。ここ数年でサテライト展示が増加し、展示の準備や展示換えなどの労力が次第に過大になりつつあるため、09年度以降に現体制で続けるか検討する必要がある。そのほか大学の研究・教育を社会に紹介する事業として、08年度に福岡空港で昆虫標本を展示し、「カブトムシ教室」の講師をした。九大・糸島会と共同で、新キャンパス周辺地域でコミュニケーションミュージアム事業を計画し、地域資源再発見塾、大学と地域の交流事業を行った。

- “インターネット博物館”を充実させ、公開展示、大学収蔵標本の概要を紹介する。
- ◎ 毎年、公開展示・学内展示などが終了するたびに展示パネルの内容を順次公開し、適宜情報を追加・充実させている。これは他の大学博物館では行っていない独自の取り組みであり、外部からのアクセスや出版社などからの転載依頼も多く好評を頂いている。今後も継続して情報を追加・充実させる必要がある。
- フィールド・ミュージアム部を中心に、社会人及び学生を対象とした野外実習を実施する。
- ◎ 07年度に、農学研究院の兼任教員と、英彦山の施設を利用した昆虫の野外観察の計画を立案した。08年度にはフィールド・ミュージアム部の立ち上げに備え、学振の「ひらめきときめきサイエンス」事業を活用し英彦山の施設を利用した昆虫・植物・陸貝・岩石の野外観察会を実施した。今後、関係施設と連絡をとり、活動内容や協力研究員へのフィールド・ミュージアム部参画の呼びかけ、事故・災害への保証・対応を検討し、活動を本格化する必要がある。
- 博物館専任教員及び外部の研究者を講師とした普及講演会を開催し、生涯学習に寄与する。
- ◎ 07年度は第7回公開講演会「鉱山遺跡を楽しもう」（石見銀山・鉱山関係）、08年度には第8回公開講演会「植物の世界―お花畑から遺伝子まで―」を実施した。館者の反応は概ね良好であり、今後もニーズを的確に把握しつつ、興味深いテーマを開拓していく必要がある。
- 国内の博物館職員、学芸員等の研修（リカレント教育）及び研究の訓練を行う。
- ◎ 06年度には大学博物館においてリカレント教育を行う場合の問題点を教員会議の議題として検討を始めたが、08年度まで着手できていない。09年度以降の課題である。
- 青少年の理科離れの是正や総合学習を積極的に支援するため、県・市町村教育委員会との間で、小中高校教員が博物館で初等・中等教育に当たる制度を検討する。
- ◎ 大学博物館が、初等中等教育にどの程度、どのように関与していくのか議論が必要な問題であ

るが、今の所、県・市町村教育委員会との間での制度の検討には着手できておらず、学内的な検討に留まる。06年度に、USI 子供プロジェクトの教員との懇談会を開き初頭・中等教育と大学博物館の関わりに関する意見を聞いた。また「海のゆりかご」企画において小学4年生対象のワークショップを実施し、その過程で実施先の小学校の総合学習担当教諭から総合学習支援に対する要望等を聞いた。07年度に、三島助教を中心とするP&P研究「九州大学博物館を展示を利用した実践的研究—アウトリーチ活動のあり方と大人と子どもとの関わりを促すツール開発—」が採択された。初等・中等教育と大学博物館の関わりを研究するためのセミナーを、07年度に6回、08年度に6回実施したほか、個別の聞き取りも行い、当該問題に詳しい専門家から意見を聞き議論を行った。

このような情報の収集を09年度以降にも継続させるとともに、様々な実践を試行的に行っていく必要があるが、大学博物館が側面からの支援でなく主体的に初等・中等教育に関わる程度・方法については、大学博物館の主要ミッションとの関係で議論を重ねる必要がある。

- 博物館活動を支援する館外組織としてボランティア制度を取り入れる。九州大学総合研究博物館の社会教育事業を通じて、博物館の円滑な運営を助ける教育ボランティアと標本の収集、整理、データベース化と研究を補助する研究ボランティアの育成を図る。
  - ◎ 04年度にボランティア制度を導入済みの他博物館の現状を調査することを計画し、05年度に前原市伊都博物館のボランティア制度の調査を開始した。06年度に九州大学の現状に合ったボランティア制度の研究に着手したが、07年度まで導入できていない。08年度以降の課題であるが、旧工学部本館での常設展示室開設等をきっかけに本格的に検討する必要がある。
- 2) 教育研究活動に関連した国際交流に関する具体的方策
- 国外の博物館職員、学芸員等の研修（リカレント教育）及び研究の訓練を行う。
  - ◎ 07・08年度に国外の若手研究者を招いての研修や訓練を行うことはできなかったが、教育研究活動における国際交流の実践として、西宮市貝類館の協力を得て、別刷り類の収集を行い、カセツアート大学水産学部、プーケット海洋生物学研究センターに寄贈して施設の充実を助けた。08年度にはマレーシア科学大学で開かれたJSPS NaGISA Bivalve Taxonomy Workshopの講師となり、東南アジアの学生、若手研究者の教育を行った。今後もこのような地道な国際交流の努力を続ける必要がある。
  - 関連部局の教員と共同で、東南アジアを中心に海外の研究者をパートナーとした共同研究を実施する。
  - ◎ 植物関係では、07年度は中島平和財団のアジア地域重点研究助成で採択された中国の研究者との共同研究により、中国内での野外調査（2回）を行い、また先方の研究者による国内での野外調査（2回）を行い、来年度以降の共同研究についても確約した。当面この共同研究を継続させていく。軟体動物関係では、07・08年度に韓国の研究者と日本の陸生貝類の起源と移動に関する共同研究を計画し、昆虫関係では07年度に中国・イラン・オーストラリア・オランダ・アメリカ・カナダの研究者との共同研究を実施し、08年度にはマレーシアで野外調査を行い、中国・イラン・オーストラリア・オランダ・イギリス・アメリカ・カナダ・オーストラリア・マレーシア・タイの研究者との共同研究を実施した。

## Ⅱ. 組 織

九州大学総合研究博物館の組織は、館長のもと研究部、事務部、資料部、フィールド・ミュージアム部から構成されている。さらに、運営の諮問機関として運営委員会がある。

### 館 長

2007年4月－2009年3月 多田内修（農学研究院）

### 運営委員会委員

#### ◎2007年度

多田内修（総合研究博物館館長・委員長）、松隈明彦（副館長・副委員長）、柴田洋三郎（副学長）、有川節夫（附属図書館長）、村上和彰（情報基盤センター長）、佐伯弘次（人文科学研究院）、服部英雄（比較社会文化研究院）、堀 賀貴（人間環境学研究院）、熊野直樹（法学研究院）、北澤 満（経済学研究院）、鈴木敦典（言語文化研究院）、佐伯弘好（理学研究院）、隠居良行（数理学研究院）、目野主税（医学研究院）、名方俊介（歯学研究院）、田中宏幸（薬学研究院）、江原幸雄（工学研究院）、大島久雄（芸術工学研究院）、高橋規一（システム情報科学研究院）、大瀧倫卓（総合理工学研究院）、飯田 弘（農学研究院）、籾 博幸（生体防御医学研究所）、市川 香（応用力学研究所）、三島正章（先導物質科学研究所）、岩永省三（総合研究博物館）、中牟田義博（同）、中西哲也（同）、宮崎克則（同）、秋枝一敏（理学部等事務長）

#### ◎2008年度

多田内修（総合研究博物館館長・委員長）、松隈明彦（副館長・副委員長）、柴田洋三郎（副学長）、有川節夫（附属図書館長）、村上和彰（情報基盤センター長）、佐伯弘次（人文科学研究院）、溝口孝司（比較社会文化研究院）、堀 賀貴（人間環境学研究院）、熊野直樹（法学研究院）、堀井伸浩（経済学研究院）、中里見 敬（言語文化研究院）、佐伯弘好（理学研究院）、隠居良行（数理学研究院）、目野主税（医学研究院）、名方俊介（歯学研究院）、田中宏幸（薬学研究院）、江原幸雄（工学研究院）、古賀 徹（芸術工学研究院）、高橋規一（システム情報科学研究院）、堤井君元（総合理工学研究院）、川口栄男（農学研究院）、籾 博幸（生体防御医学研究所）、市川 香（応用力学研究所）、三島正章（先導物質科学研究所）、岩永省三（総合研究博物館）、中牟田義博（同）、中西哲也（同）、宮崎克則（同）、秋枝一敏（理学部等事務長）

### 研 究 部（2007－2008年度）

一次資料研究系：教 授 岩永省三	准教授 中牟田義博
分析技術開発系：教 授 松隈明彦	准教授 中西哲也
開示研究系：准教授 宮崎克則	助 教 三島美佐子 助 教 丸山宗利

### 事 務 部（2007－2008年度）

専 門 職 員：木下隆司

事 務 補 佐 員：赤峰倫佳

研究支援推進員：福原美恵子

資料部 (2007年度) ※下線は分野主任, ( ) 内は所属を示す。

【自然史部門】

動物・医動物分野：姫野國祐 (医), 飯田 弘 (農), 金子たかね (農)

植物分野：矢原徹一 (理), 川口栄男 (農), 井上 晋 (農), 安井 秀 (農), 三島美佐子 (博)

昆虫分野：矢田 脩 (比文), 高見正見 (農), 多田内修 (農), 緒方一夫 (熱研), 荒谷邦雄 (比文), 植野高敏 (農), 紙谷聡志 (農), 津田みどり (農)

水生生物分野：川口栄男 (農), 野島 哲 (理), 森 敬介 (理), 望岡典隆 (農)

地史古生物分野：高橋孝三 (理), 佐野弘好 (理), 松隈明彦 (博), 鹿島 薫 (理), 清川昌一 (理)  
下山正一 (理), 坂井 卓 (理),

岩石分野：寅丸敦志 (理), 石田清隆 (比文), 池田 剛 (理), 中牟田義博 (博), 宮本知治 (理)

鉱物分野：加藤 工 (理), 石田清隆 (比文), 桑原義博 (比文), 石橋純一郎 (理), 中村智樹 (理),  
久保友明 (理), 中牟田義博 (博), 上原誠一郎 (理), 本村慶信 (理)

人類先史部門：田中良之 (比文), 中橋孝博 (比文)

有機化石分野：山内敬明 (理), 北島富美雄 (理)

地球電磁気分野：湯元清文 (理)

生薬分野：田中宏幸 (薬)

【文化史部門】

考古分野：宮本一夫 (人文), 岩永省三 (博), 溝口孝司 (比文)

記録資料分野：佐伯弘次 (人文), 服部英雄 (比文), 有馬 学 (比文), 吉田昌彦 (比文), 中野 等 (比文), 高野信治 (比文), 植田信廣 (法), 熊野直樹 (法), 田北廣道 (経), 宮崎克則 (博)

建築史分野：未定

【技術史部門】

資源・素材分野：福島久哲 (工), 渡邊公一郎 (工), 今井 亮 (工), 中西哲也 (博),

機械分野：鬼鞍宏猷 (工)

フィールド・ミュージアム部 (2007年度)

陸生生物：大槻恭一 (農・演習林), 大賀祥治 (農・演習林), 薛 孝夫 (農・演習林),

水生生物：野島 哲 (理), 森 敬介 (理)

博物館教員：館長および専任教員

協力研究員 (2007年度)

相原安津夫 (九州大学名誉教授), 青木義和 (九州大学名誉教授), 井澤英二 (九州大学名誉教授), 井川敏恵 ((独) 産業技術総合研究所特別研究員), 木船悌嗣 (福岡大学名誉教授), 小島弘昭 (東京農業大学准教授), 三枝豊平 (九州大学名誉教授), 寫 洪 (九州大学名誉教授・元博物館長), 島田允堯 (九州大学名誉教授), 平嶋義宏 (九州大学名誉教授), 森本 桂 (九州大学名誉教授), 柳 哮 (九州大学名誉教授), 湯川純一 (九州大学名誉教授・元博物館長)

## 資料部 (2008年度)

### 【自然史部門】

動物・医動物分野：飯田 弘 (農)，金子たかね (農)

植物分野：矢原徹一 (理)，川口栄男 (農)，井上 晋 (農)，安井 秀 (農)，三島美佐子 (博)

昆虫分野：矢田 脩 (比文)，高見正見 (農)，多田内修 (農)，緒方一夫 (熱研)，荒谷邦雄 (比文)，植野高敏 (農)，紙谷聡志 (農)，高須啓志 (農)，津田みどり (農)

水生生物分野：川口栄男 (農)，野島 哲 (理)，森 敬介 (理)，望岡典隆 (農)

地史古生物分野：高橋孝三 (理)，佐野弘好 (理)，松隈明彦 (博)，鹿島 薫 (理)，清川昌一 (理)  
下山正一 (理)，坂井 卓 (理)，

岩石分野：小山内康人 (比文)，寅丸敦志 (理)，石田清隆 (比文)，池田 剛 (理)，中牟田義博 (博)，中野伸彦 (比文)，宮本知治 (理)

鉱物分野：加藤 工 (理)，石田清隆 (比文)，桑原義博 (比文)，石橋純一郎 (理)，中村智樹 (理)，久保友明 (理)，中牟田義博 (博)，上原誠一郎 (理)，本村慶信 (理)

人類先史部門：田中良之 (比文)，中橋孝博 (比文)

有機化石分野：山内敬明 (理)，北島富美雄 (理)

地球電磁気分野：湯元清文 (理)

生薬分野：田中宏幸 (薬)

### 【文化史部門】

考古分野：宮本一夫 (人文)，岩永省三 (博)，辻田純一郎 (人文)，溝口孝司 (比文)

記録資料分野：佐伯弘次 (人文)，後小路雅弘 (人文)，服部英雄 (比文)，有馬 学 (比文)，吉田昌彦 (比文)，中野 等 (比文)，高野信治 (比文)，植田信廣 (法)，熊野直樹 (法)，田北廣道 (経)，宮崎克則 (博)

建築史分野：未 定

カルテ資料分野：前原喜彦 (医)，江頭健輔 (医)，水元一博 (附属病院)，宮崎克則 (博)

### 【技術史部門】

資源・素材分野：福島久哲 (工)，渡邊公一郎 (工)，今井 亮 (工)，中西哲也 (博)，

機械分野：鬼鞍宏猷 (工)

## フィールド・ミュージアム部 (2008年度)

陸生生物：大槻恭一 (農・演習林)，大賀祥治 (農・演習林)，薛 孝夫 (農・演習林)，

水生生物：野島 哲 (理)，森 敬介 (理)

博物館教員：館長および専任教員

## 協力研究員 (2008年度)

相原安津夫 (九州大学名誉教授)，青木義和 (九州大学名誉教授)，井澤英二 (九州大学名誉教授)，井川敏恵 ((独)産業技術総合研究所特別研究員)，木船悌嗣 (福岡大学名誉教授)，小島弘昭 (東京農業大学准教授)，三枝豊平 (九州大学名誉教授)，寫 洪 (九州大学名誉教授・元博物館長)，島田允堯 (九州大学名誉教授)，高橋直樹 (純真短期大学助教)，中島 淳 (日本学術振興会特別研究員)，中山慎也 (出雲市立第一中学校教諭)，平嶋義宏 (九州大学名誉教授)，廣永輝彦 ((株)地球環境計画九州支社)，本村慶信 (元九州大学助教)，森本 桂 (九州大学名誉教授)，柳 哮 (九州大学名誉教授)，湯川純一 (九州大学名誉教授・元博物館長)

## Ⅲ. 事業

### 1. 開 示—展 示—

九州大学が、市民に開かれた大学としての責任を果たす一つの窓口として、大学で行っている教育・研究の成果を広く一般に公開・情報発信する目的で、各種の展示を行っている。

#### A. 公開展示

創設以来、学外の施設を借用して年に一回実施する、一般向きで規模の大きな展示を「公開展示」と呼んでいる。資料部を通して学内諸部局に研究成果の発表を依頼している。

#### 第9回公開展示「わくわくどきどき化石のヒミツ—化石が語る地球の環境—」

(第2回少年科学文化会館・九州大学総合研究博物館合同企画展)

会 期：2007年7月21日～8月30日

会 場：福岡市立少年文化会館1階学習室

主 催：九州大学総合研究博物館・福岡市立少年文化会館

入場者数：23,098名

内 容：現在化石化した過去の生物は、過去に起きた地球環境の変化を現在に伝えてくれる。過去の地球環境の変化の末に現在の地球環境が形作られ、さらにその先には、将来の地球のすがた姿を予測することもできる。九州大学では、理学研究院と比較社会文化研究院において、過去の地球環境を探ろうとしている研究部門があり、その研究の一端を紹介した。この公開展示は、福岡市少年科学文化会館との最初の本格的な合同企画展となった。

#### 第10回公開展示「奴国の南—九大筑紫地区の埋蔵文化財—」

会 期：2009年1月1日～2月8日 9:30～17:00

会 場：九州国立博物館 4階文化交流展示室

主 催：九州大学総合研究博物館・九州国立博物館

入場者数：40,161名

内 容：九州大学は、筑紫地区の諸施設の建設に先立って、1978年度から1998年度まで埋蔵文化財の発掘調査を行い、多大の成果をあげた、しかし諸般の事情からその調査成果や出土品がまとまって学外に紹介される事はなかった。今回の展示では、主要出土品—巴形銅器鋳型・銅戈鋳型・祭祀遺構出土土器などの弥生時代遺物、石釧・須恵器・須恵器製作用具などの古墳時代遺物、墨書土器・硯・丸靱・木簡・ヘラ書き須恵器などの歴史時代遺物—を網羅的に展示するとともに、他機関から関連品を借用し、比較検討できるようにした。展示は九州国立博物館の常設展示室の一郭を借用したが、国博は説明文を極力用いない方針であるため、研究成果を詳細に提示する図録を作成し、最近の研究成果を盛り込んで、周辺地域の近年の発掘調査成果も参照しつつ当該地域の有した歴史的 position を明らかにした。

## B. 特別展示

大学内の施設で年に数回実施する小規模な展示を「特別展示」と呼んでいる。研究成果のやや専門的な紹介や九大所蔵標本の公開を主とする。

### 「九州大学教育・研究の最前線—第6回P&P研究成果一般公開—」

会 期：2007年5月9日（水）～6月8日（金）

会 場：50周年記念講堂

共 催：九州大学総合研究博物館・研究戦略委員会

入場者数：440名

内 容：九州大学の研究を代表するP&P採択課題のうち8課題の研究成果を分かりやすい形でパネル等により一般公開する。

「植民地朝鮮における日本人生活誌の再構成—木浦とその周辺地域を事例として—」代表 石川捷治（法学研究院）

「立木の非破壊的品質評価技術の開発に向けた基礎的研究」代表 古賀信也（農学研究院・農学部付属演習林北海道演習林）

「新キャンパス地域の遺跡探査」代表 牛嶋恵輔（工学研究院）

「ユビキタス社会における電子図書館のソフト面高度化に関する研究」代表 池田大輔（システム情報科学研究院）

「ポストゲノム発達脳科学の創生とその研究・教育基盤の構築」代表 吉良潤一（医学研究院）

「雲仙火山のマグマ供給系とマグマ蓄積過程の解析」代表 清水 洋（理学研究院附属地震火山観測研究センター）

「「天然物」と「人」の整理・感性相互作用に着目した自然と人のインターフェイス解析」代表 清水邦義（農学研究院）

「溶媒可溶化カーボンナノチューブ」代表 中嶋直敏（工学研究院）

### 「古人骨資料・動物骨格標本一般公開」

会 期：2007年5月11日

会 場：第一分館骨格標本室

内 容：貴重な古人骨資料60体・脊椎動物骨格標本200体の公開。古人骨は日本人起源問題の解明に用いられた重要資料。動物骨格は希少種を含む九州有数のコレクション。

### 「九州大学教育・研究の最前線—第7回P&P研究成果一般公開—」

会 期：2008年5月9日～6月6日

会 場：50周年記念講堂2・3階

共 催：九州大学総合研究博物館・研究戦略委員会

入場者数：373名

内 容：九州大学の研究を代表するP&P採択課題のうち8課題の研究成果を分かりやすい形でパネル等により一般公開する。

「新しい知覚の学—アイステーシスからの人間理解—」代表 三浦佳世（人間環境学研究院）  
「平成 18 年問題に対応するための数学・理科基礎学力調査」代表 風間英明（数理学研究院）  
「伊都キャンパス農学研究院分室を拠点とした糸島地域の持続的農業のための効率的な水資源利用技術の研究展開」代表 平松和昭（農学研究院）  
「窓ガラス清掃ロボットの開発」代表 山本元司（工学研究院）  
「地下水位観測に基づく福岡地域の地震活動予測の研究」代表 江原幸雄（工学研究院）  
「ナノ・マイクロ・マクロ生体医工学研究教育拠点の形成」代表 村上輝夫（工学研究院）  
「系統別樹状細胞前駆細胞の同定および機能解析」代表 赤司浩一（九大病院）  
「相対性理論シミュレーター：教材開発の実習プログラム」代表 松井 淳（理学研究院）

#### 「中山平次郎先生関係資料展」

会 期：2008 年 5 月 9 日～6 月 6 日  
会 場：50 周年記念講堂 3 階展示室  
内 容：2007 年 1 月に寄贈された医学部初代病理学教授中山平次郎先生収集の考古学資料を初公開する。鴻臚館を福岡城内と推定した根拠資料など学史上重要な資料を含む。

#### 「古人骨資料・動物骨格標本一般公開」

会 期：2008 年 5 月 12 日  
会 場：第一分館骨格標本室  
入場者数：78 名  
内 容：貴重な古人骨資料 60 体・脊椎動物骨格標本 200 体の公開。古人骨は日本人起源問題の解明に用いられた重要資料。動物骨格は希少種を含む九州有数のコレクション。

#### 「九州帝国大学」のパブリックアートと鞆ペンで描く「九大」展」

会 期：2008 年 5 月 12 日  
会 場：旧工学部本館 4 階第 2 会議室  
内 容：1930 年から使われ帝国大学時代の雰囲気をよく残す豪華な会議室と、壁面を飾る巨大な油絵（青山熊治作）を公開。  
入場者数：440 名

#### C. サテライト展示

箱崎地区が集客上やや難があるため、当館の存在や活動を知ってもらうべく、学外の数か所の施設を借用して小規模の展示を行っている。

##### a. 福岡空港第 1 ターミナル 2 階待合室

「倭人伝の道と北部九州の古代文化Ⅲ」； 2007 年 3 月 12 日～8 月 8 日  
「倭人伝の道と北部九州の古代文化Ⅳ」； 2007 年 8 月 9 日～12 月 17 日  
「倭人伝の道と北部九州の古代文化Ⅴ」； 2007 年 12 月 17 日～2008 年 5 月 20 日  
「化石のヒミツⅠ」； 2008 年 5 月 21 日～9 月 28 日

「化石のヒミツⅡ」； 2008年9月29日～2009年2月4日

「化石のヒミツⅢ」； 2009年2月5日～

b. 前原市伊都文化会館玄関ロビー

「川の生命—うなぎ仔魚の長い旅—」；2007年5月10日～7月28日

「とる・つくる・そだてる—東シナ海の魚—」；2007年7月29日～9月21日

「とる・つくる・そだてる—資源の保護と管理—」；2007年9月22日～11月11日

「とる・つくる・そだてる—作り育てる漁業—」；2007年11月11日～2008年1月13日

「マリンバイオ—食べ物と健康に役立つ海の生き物—」；2008年1月13日～3月2日

「マリンバイオ—大きな可能性を秘める海の小さな生き物—」；2008年3月2日～5月3日

「マリンバイオ—遺伝子って何だろう—」；2008年5月4日～7月8日

「海の生命—九州近海に見られる温暖化—」；2008年7月9日～9月6日

「海の生命—海の生命を守ろう—」；2008年9月7日～11月1日

「行橋市琵琶隈古墳」；2008年11月2日～2009年1月3日

「飯塚市山ノ古墳」；2009年1月4日～

c. 福岡市保健衛生研究所「まもる—む福岡」

「植物をもっと知ろうⅡ」；2006年6月7日～2007年6月18日

「植物をもっと知ろうⅢ」；2007年6月19日～2009年1月20日

「植物をもっと知ろうⅣ」；2009年1月21日～

d. 志摩町総合保健福祉センター「ふれあい」

「海の生命—海の生命を守ろう—」；2007年5月10日～7月28日

「川の生命—多様性をはぐくむワンド—」；2007年5月29日～9月21日

「川の生命—田で生活する生物たちの危機—」；2007年9月22日～11月11日

「川の生命—有明海だけに生息するエツってどんな魚—」；2007年11月11日～2008年1月13日

「川の生命—うなぎははるか外洋で産卵する—」；2008年1月13日～3月2日

「川の生命—うなぎ仔魚の長い旅—」；2008年3月2日～5月3日

「とる・つくる・そだてる—東シナ海の魚—」；2008年5月4日～7月8日

「とる・つくる・そだてる—限りある水産資源の保護と管理—」；2008年7月9日～9月6日

「とる・つくる・そだてる—作り育てる漁業—」；2008年9月7日～11月1日

「対馬ガヤノキ遺跡」；2008年11月2日～2009年1月3日

「対馬塔の首遺跡」；2009年1月4日～

e. 二丈町健康ふれあい施設「二丈温泉きららの湯」

「マリンバイオ—小さな生き物—」；2007年5月10日～7月28日

「マリンバイオ—遺伝子って何だろう—」；2007年7月29日～9月21日

「海の生命—九州近海に見られる温暖化—」；2007年9月22日～11月11日

「海の生命—九州近海に見られる温暖化の影響—」；2007年11月11日～2008年1月13日

「川の生命—多様性をはぐくむワンド—」；2008年1月13日～3月2日  
「川の生命—田で生活する生物たちの危機—」；2008年3月2日～5月3日  
「川の生命—有明海だけに生息するエツってどんな魚—」；2008年5月4日～7月8日  
「川の生命—うなぎははるか外洋で産卵する—」；2008年7月9日～9月6日  
「川の生命—うなぎ仔魚の長い旅—」；2008年9月7日～11月1日  
「松盧国宇木汲田遺跡」；2008年11月2日～2009年1月3日  
「伊都国三雲遺跡」；2009年1月4日～

#### D. 常設展示

2007年10月の博物館の旧工学部本館3階への移転に伴い、移転後の展示室設計にむけたパイロット展示室として、旧工学部本館での常設展示室の設置を計画した。2008年3月に第9番講義室を改修して、暫定的なレビュー展示を設営し、5月8日に梶山千里総長・全理事の出席のもと、開設セレモニーを行った。開設時間は平日の10:00～16:30。展示面積は約208㎡。展示品は、学内各部局および総合研究博物館に収蔵される考古学資料、記録史料、化石標本、岩石・鉱物標本、動物標本、植物標本、昆虫標本、技術史資料の中から、貴重で興味深く教育効果の高い標本・資料類を選んで展示した。2008年度から本展示室を利用して芸術工学府の演習授業が始まったほか、各学部の授業での利用が増えつつある。

#### E. 平常展示

常設展示室の開室に伴い、当館の創設以来50周年記念講堂2・3階で実施してきた展示を「平常展示」と呼ぶことになり、一部の展示替えを実施した。

「九州大学所蔵鉱山関連資料展」

会 期：2007年12月1日～継続中

会 場：50周年記念講堂2階ホワイエ

内 容：工学部列品室で収蔵する日本を代表する鉱山の鉱石（金・銀・銅・鉛・亜鉛など）や鉱山で使用した道具、総合研究博物館が所蔵する鉱山関連文書史料などを紹介する。



常設展示室

## 2. 開 示—情報発信—

### A. インターネットミュージアム

「九州大学教育・研究の最前線—第6回 P&P 研究成果—」をホームページ上に公開（2007年12月）

「どきどきわくわく化石のヒミツ展」をホームページ上に公開（2008年7月）

「九州大学教育・研究の最前線—第7回 P&P 研究成果—」をホームページ上に公開（2008年7月）

九州大学総合研究博物館 web サイト[<http://www.museum.kyushu-u.ac.jp/>]をリニューアル(2009年3月)

### B. 所蔵標本データベース

総合研究博物館では九州大学全学共通間接経費の配分を受けるとともに、博物館運営経費の中にも予算を組み、資料部兼任教員の協力を得て、資料整理・データベース化を進めてきた。現在までに下記のコレクションについてデータベース化を終え、博物館のホームページ上で一般に公開している。なお、カッコ内は登録データ件数である。

動物・医動物標本 (148)、海洋生物標本 (8012)、昆虫標本 (80431)、植物標本 (16537)、化石標本・化石関連文献資料 (21019)、鉱物・岩石 (12346)、考古遺物 (9877)、骨格標本 (2392)、記録資料 (184102)

### C. 出版・広報

九州大学総合研究博物館概要 2007（日本語版）（2007年6月）

九州大学総合研究博物館ニュース No.9（2007年10月）

九州大学総合研究博物館年報 第2号（2007年10月）

九州大学総合研究博物館研究報告 第6号（2008年1月）

九州大学総合研究博物館概要 2007（英語版）（2008年2月）

九州大学総合研究博物館ニュース No.10（2008年3月）

九州大学総合研究博物館ニュース No.11（2008年11月）

九州大学総合研究博物館ニュース No.12（2009年3月）

『奴国の南—九大筑紫地区の埋蔵文化財—』（2009年1月）

九州大学総合研究博物館研究報告 第7号（2009年3月）

### D. 新聞等による報道

◎「わくわくどきどき化石のヒミツ展」展 九大博物館（朝日 07年8月20日）

◎九大の学術標本 230点 常設展示室オープン 箱崎 希少土器、鉱石など多彩に（毎日・日経・朝日 08年5月9・24日）

◎アミノクロウサギ剥製と骨格標本収蔵 九大総合研究博物館（南日本 08年7月23日）

◎植物の世界を探訪 九大博物館が来月29日講演会（朝日 08年10月4日）

◎外来陸貝生息域拡大 家庭菜園や花壇食害 松隈明彦総合研究博物館教授（読売 08年12月5日）

◎発見！九大のお宝ザックザク 探検！旧工学部本館 箱崎キャンパス（毎日 09年1月1日）

◎奴国の南 遺物展示 九州大筑紫地区 九博で発掘成果展（読売・日経 09年1月16・21日）

◎お宝発見 400万点超える昆虫標本 九州大（朝日 09年3月30日）

### 3. 教 育

当館教員は大学内での教育に積極的に携わっている。学芸員取得コースの講義を担当するとともに、各教員の専門分野を生かして、学部・学府での講義を兼任の教員として担当している。

#### A. 大学教育

##### a. 学芸員資格関係

科 目	担当者	開講部局	開講時期
博物館概論	松隈・岩永	理学部	07 前期・08 前期
博物館経営論	岩永・松隈	理学部	07 後期・08 後期
博物館資料論	中牟田	理学部	07 前期・08 前期
博物館情報論	中西	理学部	07 前期・08 前期
視聴覚教育メディア論	中西	理学部	07 後期・08 後期
植物学標本実習	三島	理学部	07 前期・08 前期
地球惑星科学標本実習	松隈・中牟田・中西	理学部	07 前期・08 前期
博物館資料論	岩永	文学部	08 前期
博物館学実習Ⅲ	宮崎	文学部	07 前期
博物館学実習Ⅳ	宮崎	文学部	07 後期・08 前期

##### b. 学部教育

科 目	担当者	開講部局	開講時期
地球の構成と環境	松隈 (分担)	全学共通	07 後期
地球惑星生物学	松隈	理学部	07 前期・08 前期
古生物学	松隈	理学部	08 後期
地球史生物史演習	松隈 (分担)	理学部	07 前期・08 前期
地球惑星科学実験	松隈 (分担)	理学部	07 前期
結晶物理化学	中牟田	理学部	07 後期
地球惑星物質科学	中牟田	理学部	08 後期
考古学講義XIV	岩永	文学部	08 後期

##### c. 大学院教育

科 目	担当者	開講部局	開講時期
進化古生物学	松隈	理学府	07 前期
地球惑星物質科学演習	中牟田	理学府	07 前期・08 前期
X線結晶学	中牟田	理学府	08 前期
鋳物工学実験第一	中西	工学府	07 前期・08 前期
鋳物工学実験第二	中西	工学府	07 前期・08 後期
階級社会形成論Ⅰ・Ⅲ	岩永	比較社会文化学府	07 前期・08 前期

階級社会形成論Ⅱ・Ⅳ	岩永	比較社会文化学府	07 後期・08 後期
地域資料情報論Ⅲ	宮崎	比較社会文化学府	07 通年
地域資料情報論Ⅳ	宮崎	比較社会文化学府	08 通年
博物館情報科学特論	中西	芸術工学府	08 集中（3月）
感性学入門	三島（分担）	新学府プレ授業	08 後期

#### d. その他

大 学	担当者	科 目	開講時期
福岡教育大学	岩永	考古学概論	08 集中（8月）
西南学院大学	宮崎	古文書学	08 通年

### B. 教育支援

第一分館2階の骨格標本室を、開学記念行事・公開講演会等に合わせて公開するとともに、学内各部署からの依頼に応じて適宜公開した。同建物1階の自然史資料室（高壮吉鉱物標本など）も、博物館への移管はまだであるが、適宜公開した。旧工学部本館3階の常設展示室は、2008年度から公開を開始し、芸術工学研究院による演習の場として提供したほか、学内各部署による授業での利用が増えつつある。

博物館所蔵標本資料の利用希望に対処するため、標本資料閲覧要綱（18年度制定）を定め、骨格標本については要綱に則って学生への閲覧を開始した。閲覧の希望は年々増えつつあり、骨格標本以外の館蔵資料の増加につれてますます増えると予想される。それらに対応する体制の整備が今後の課題である。

大型プリンターの開放、イベントパネルの貸し出しによる教育の支援を継続的に行っている。大型プリンターは教員・学生から学会発表資料等の作成での使用希望が毎年20件前後あり、極力要望にこたえるようにしている。

開放実績数 : 2007年度25件。2008年度18件。

貸し出し実績数 : 2007年度9件。2008年度は常設展示で使用のため中断。



芸術工学研究院による  
演習（常設展示室）

## 4. 研 究

教員個人の研究ではなく、博物館としての固有の研究テーマの追求に関わる事業・行事を紹介する。

### A. P & P 研究「九州大学博物館展示を利用した実践的研究—アウトリーチ活動のあり方と、大人と子どもの関わりを促すツール開発—」

公募・採択された研究グループに一定の期間研究費等の重点配分を行い、九大の教育と研究の一層の発展を図ることを目的とする P&P (教育研究プログラム・研究拠点形成プロジェクト) の B タイプ 2 (学術文化の総合的な振興を目的とした、人文・社会及び基礎科学の研究に対する配分) に、三島助教を代表とする研究が採択された。本研究は、総合研究博物館の標本室公開や公開展示を、子供を含めた学内外の利用者がよりよく活用できるようにするため、現場にフィードバックできる実践研究を行うことを目的とする。具体的には、来場者調査、展示補助ツールの開発、博物館関連のセミナー開催、インクルーシブな場の試作などを行う。

#### 来場者調査

「わくわくどきどき化石のヒミツ」展に際して実施した。

#### 展示補助ツールの開発

「わくわくどきどき化石のヒミツ」展に際してクイズ形式の「親子 de クエスチョン」を作成・配布し好評であった (p29 写真左下)。

#### セミナー

##### 第0回 (プレセミナー)

日 時：2007年5月22日 (火) 18:30～19:30

場 所：箱崎キャンパス旧工学部本館2階207号室

内 容：「研究計画について」三島美佐子 (総合研究博物館)

「江戸のモノづくりに見るアウトリーチ活動」中西哲也 (総合研究博物館)

「全米チルドレンズミュージアム学会及び全米博物館協会 2007 の報告」清水麻紀 (USI 子どもプロジェクト)

##### 第1回

日 時：2007年7月6日 (金) 18:30～20:30

場 所：箱崎キャンパス21世紀交流プラザ・セミナー室

内 容：「みんなの「夢」を「かたち」にするには」松永 久 (三菱総合研究所・地域経営研究センター 主任研究員)

「「夢」が「かたち」になったらエデュケーターの出番！」太田 歩 (国立歴史民俗博物館・広報サービス室 研究支援推進員)

##### 第2回

日 時：2007年8月31日 (金) 17:00～19:30

場 所：旧工学部本館2階207号室 USI セミナー室

内 容：「くるしまぎれの陳列棚—コミュニケーションをデザインすること—」木村政司（日本大学  
芸術学部デザイン学科 教授）  
「自然史博物館とサイエンスコミュニケーション」渡辺政隆（文部科学省科学技術政策研究  
所 上席研究官）

### 第3回

日 時：2007年11月20日（火）17:30～19:00  
場 所：旧工学部本館2階207号室 USI セミナー室  
内 容：「展示、それは利用者の経験—国内外の展示例・開発プロセス・経験のあとに—」染川香  
澄（ハンズ・オン・プランニング代表）

### 第4回

日 時：2007年12月17日（月）17:30～19:00  
場 所：21世紀交流プラザI・セミナー室B  
内 容：「科学者と子どもたちで作る野の草花図巻—ケータイを使ったコラボレーション—」竹中  
真希子（大分大学教育福祉科学部・附属教育実践総合センター 准教授）  
「水族館における、携帯電話を使用した連携学習の試み」高田浩二（マリンワールド海の中  
道海洋生態科学館 館長）

### 第5回

日 時：2008年3月25日（火）18:00～20:00  
場 所：21世紀交流プラザI・1階多目的ホール  
内 容：「博物館職員・研究者の立場から—日本の博物館教育の現状を考える—」井上由佳（国立歴  
史民俗博物館 研究支援推進員）  
「人の記憶・地域の記憶と、博物館をつなぐ」重盛恭一（まち研究所 代表）

### 第6回

日 時：2008年3月26日（水）18:00～19:30  
場 所：21世紀交流プラザI・Culture Cafe  
内 容：「サイエンスカフェってなに？」三上直之（北海道大学 CoSTEP 特任教授）

### 第7回

日 時：2008年6月27日（金）18:30～20:00  
場 所：九州大学大橋サテライト・ルネット1階  
内 容：「インクルーシブデザインからの大学博物館デザイン・アプローチ」平井康之（九州大学芸  
術工学研究院 准教授）

### 第8回

日 時：2008年7月8日（火）18:30～20:00  
場 所：21世紀交流プラザI・1階多目的ホール  
内 容：「大学美術館が実践する『ひらめきアートプログラム』」緒方 泉（九州産業大学美術館 准  
教授）

### 第9回

日 時：2008年8月11日（月）17:00～19:00  
場 所：21世紀交流プラザI・1階多目的ホール  
内 容：「サイエンス・コミュニケーションとサイエンス・ライティング」渡辺政隆（科学技術振興

機構 科学コミュニケーションスーパーバイザー)

#### 第10回

日時：2008年8月27日(水) 18:30～20:00

場所：21世紀交流プラザI・1階多目的ホール

内容：「大学博物館の現在像—今、博物館に求められるもの—」岩槻邦男(兵庫県立人と自然の博物館館長)

#### 第11回

日時：2008年10月1日(水) 18:30～20:00

場所：21世紀交流プラザI・1階多目的ホール

内容：「コミュニケーションってなに？」黒川紘美(日本科学未来館 科学コミュニケーション)

#### 第12回

日時：2009年3月2日(月) 18:00～19:30

場所：旧工学部本館2階207号室 USIセミナー室

内容：「オットー・ノイラートの視覚教育(アイソタイプ)—ミュージアム、展示デザインへの貢献を中心として—」伊原久裕(九州大学芸術工学研究院 准教授)

#### 第13回(最終回)

日時：2009年3月24日(火) 17:00～18:30

場所：21世紀交流プラザI・2階セミナー室B

内容：「キャンパスが移るとのこと—都心と郊外の位相—」中川壽之(中央大学大学史編纂課)

#### ワークショップ

##### 「コミュニケーション・ワーク：全2回」

日時：1回目2008年6月12日 18:30～20:00、2回目2008年6月16日 18:30～20:00

場所：21世紀交流プラザI・1階多目的ホール

内容：コミュニケーションに関するグループワークと、発声についてのワークショップ。

講師：鮫島宗哉(フリーアナウンサー)

##### 「みんなで博物館をつくろう！インクルーシブデザインワークショップ」

日時：2008年6月28日(土) 10:00～17:00

場所：総合研究博物館常設展示室

内容：総合研究博物館・常設展示室について、現状を理解しグループで提案を作る。

講師：平井康之(九州大学芸術工学研究院 准教授)

##### 「つどう・かたる・つなぐ—科学と社会の新しい関係づくり—」

日時：2008年7月5日(土) 14:00～18:00

場所：六本松キャンパス学生会館第一食堂

内容：研究者・学生など科学に携わっている大学人と、学外一般の方が一堂に会し、科学について語ったワールドカフェ。

参考：主催「つどう・かたる・つなぐ」実行委員会(三島美佐子・加留部貴行・佐々木圭子・小田垣孝)、共催「科学の公園」をつくる会、九州大学総合研究博物館、九州大学ユーザーサイエンス機構、協力(独)科学技術振興機構(JST)、NPO法人日本ファシリテーション協

会、九州大学女性研究者支援室(SOFLe)

「サイエンスライティング・エディティング」

日 時：2008年8月11日(月) 13:00~16:00、12日(火) 10:00~12:00

場 所：21世紀交流プラザI・1階多目的ホール

内 容：一般向けサイエンス・ライティングに関するスキルと、研究者が書いた難解な解説や文章を一般向けに書き下すスキルに関する実習。

講 師：渡辺政隆(科学技術振興機構 科学コミュニケーションスーパーバイザー)

「今日はキッズミュージアムの日！」

日 時：2009年3月14日(土) 10:00~17:00

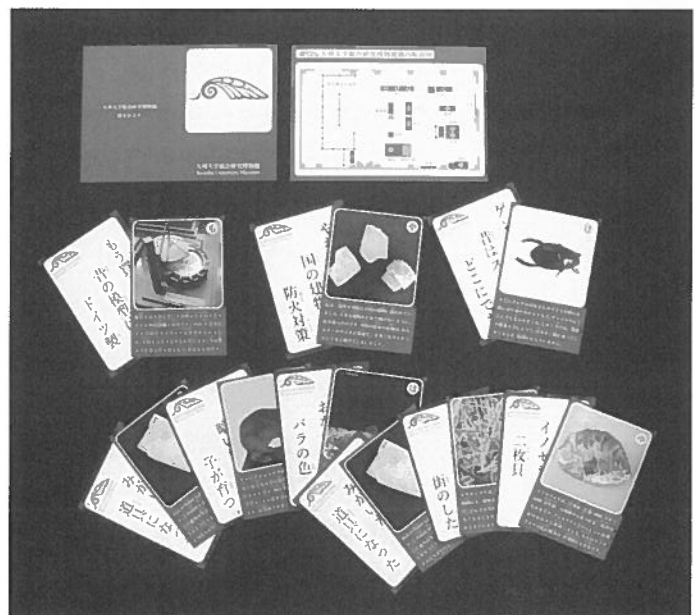
場 所：総合研究博物館常設展示室

内 容：総合研究博物館・常設展示室の現状を理解し、「こんな展示があったらいいな」という提案を作る。

講 師：平井康之(九州大学芸術工学研究院 准教授)



上：ワークショップ  
下：展示補助ツール2種



## B. 全国大学博物館等協議会・博物科学会

大学博物館は、一般の博物館と異なる大学博物館固有の課題と研究分野を持つ。それらの多くは他の大学博物館と共通しており、各館が別個に取り組むだけでなく、実践例やその結果などについて大学博物館相互で情報交換を行うことによって、研究を活性化していくことが有効である。また情報交換は単発的でなく、システムを確立して持続的に深化していく必要がある。

そのため、2004年度以降毎年、大学博物館等協議会・同館長会議・全国博物館長会議に出席し意見交換・情報収集を行っている。このような大学博物館どうしの問題意識の共有を背景として2006年度に博物科学会が設立され、年に一回の大学博物館等協議会大会と同日に学会形式で課題への取り組みを研究発表する場ができた。2007年度には九州大学で大学博物館等協議会2007年大会・第2回博物科学会が開催された。

### 第10回全国大学博物館等協議会・第2回博物科学会の開催

期 間：2007年6月7日（木）～8日（金）

場 所：50周年記念講堂・21世紀交流プラザ

参加者：31団体、74名

挨拶 多田内 修（九州大学総合研究博物館館長）

挨拶 梶山 千里（九州大学総長）

挨拶 馬渡 俊介（全国大学博物館等協議会会長・北海道大学総合博物館館長）

挨拶 久保庭真一（博物館協会専務理事）

特別講演「GBIFと日本の自然史系博物館：標本資料データベースから何が展望できるか」

松浦啓一（国立科学博物館標本資料センター）

一般講演「サイエンスミュージアムネットの現状と課題」

井上 透（国立科学博物館）

「新しい標本研究の道具：浮遊性有孔虫電子標本システム」

佐々木 理（東北大学）・岩下智洋（ホワイトラビット）

「コンテンツマネジメントシステム（XOOPS）を使った電子博物館サイト構築の試み」

吉田尚生（北海道大学総合博物館）

「北大総合博物館セミナー及び企画展示ホームページ自動更新システムのすべて」

莊子香織・小俣友輝（北海道大学総合博物館）

「大人向け体験学習プログラム「貝体新書」の開発」

大野照文（京都大学総合博物館）

「名古屋大学博物館における標本資料の管理―到達点と課題」

西川輝昭・西田佐知子（名古屋大学博物館）

「愛知教育博物館―私立の自然史博物館のさきがけ」

西川輝昭（名古屋大学博物館）

「次世代ミュージアムに係る研究―M3プロジェクト」

洪 恒夫・松本文夫（東京大学総合研究博物館）

「来館者調査―研究プロジェクトとしての取り組み」

阿部剛史・内田智子・小林快次・小俣友輝・庄子香織・湯浅万紀子  
(北海道大学総合博物館)

「準分類学者(パラタクソノミスト)養成講座の成果と問題点」

山本ひとみ・大原昌宏(北海道大学総合博物館)

「ラオスにおけるトラベリング・ミュージアムの実践」

落合雪野(鹿児島大学総合研究博物館)・佐藤優香(国立歴史民俗博物館)

「自律型ボランティア組織の実践:みんぱくミュージアム・パートナーズの活動」

野林厚志(国立民族学博物館)

「教職・学芸員希望の学生と連携した「地域子ども教室」の取組について」

宇田津徹朗・植松秀男(宮崎大学)

「地域に開かれた博物館を目指して」

江口太郎(大阪大学総合学術博物館)

「大学博物館と科学館の連携によるフィールドセミナーの試み:Ⅰ.運営について」

東田和弘(名大博)・桂田祐介(名大博)・亀高正男(名大博)・西本昌司(名市科学館)・  
中村壽男(名市科学館)・吉田英一(名大博)・足立守(名大博)・毛利勝廣(名市科学館)

「大学博物館と科学館の連携によるフィールドセミナーの試み:Ⅱ.実施について」

桂田祐介(名大博)・東田和弘(名大博)・亀高正男(名大博)・西本昌司(名市科学館)・  
中村壽男(名市科学館)・吉田英一(名大博)・足立守(名大博)・毛利勝廣(名市科学館)

「岩手大学OBを知ってもらうための展示—宮沢賢治企画展—」

岡田幸助・宮本 裕・竹原明秀・藤田公仁子(岩手大学ミュージアム)

「体感型の古地図展示—京都大学総合博物館企画展「地図出版の四百年」を例に—」

上杉和央(京都大学総合博物館)

「自然史の成果を伝える—京都大学総合博物館「動物地理学」企画展を例に—」

本川雅治(京都大学総合博物館)

「江戸時代に制作された木骨の比較研究」

片岡勝子(広島大学)・安嶋紀昭(広島大学)・馬場悠男(国立科学博物館)



## 5. 収蔵管理

### A. 移管標本・資料

#### a. 人文科学研究院考古学研究室旧蔵考古資料

老朽化プレハブ2棟収蔵分。収蔵していたプレハブが2004年の台風20号で倒壊寸前となったため、2008年1月に、箱崎文系地区から第一分館へ移動し、管理を考古学研究室から総合研究博物館へ移した。移管日2008年1月28日。

#### b. 九大病院カルテ資料 (p33 写真上)

段ボール箱8000箱、16万冊。九大病院地区の再開発に伴い、2008年1月に、病院地区旧看護師宿舎から箱崎地区旧工学部4号館1・2階(第二分館)へ移動し、管理を九大病院から総合研究博物館へ移した。移管日2008年2月14日。県立福岡病院時代の明治10年代のカルテもあり、「人の記録」として保存・整理・目録化し、今後の研究に活用していく必要があるが、「個人情報保護法」など法的側面からの検討が必要となる。

#### c. 玉泉館資料

10,245点。玉泉館は旧制福岡高等学校教授・玉泉大梁氏が収集した資料を中心とする展示施設であり六本松地区に存在したが、1987年に解体され、資料は図書館六本松分館に移され、考古学資料は比較社会文化研究院基層構造講座が管理してきた。すでに2006年度に博物館に移管されていたが移動はしていなかった。六本松地区の伊都への移転に先立ち、2008年9月に第一分館に移動した。整理を進め2009年度以降に一般公開する予定である。

### B. 受贈標本・資料

#### a. アマミノクロウサギ (p33 写真右下)・アマミシギ

各1点。環境省九州地方環境事務所那覇自然環境事務所より。2007年7月18日受贈。

#### b. 現生イモガイ類 (軟体動物門腹足綱イモガイ科) (p33 写真左下)

2種6個体。総務部法令審議室・百崎義隆孝氏より。2008年1月に受贈。

#### c. 中国旧熱河省凌源県産ジュラ紀魚類化石

1点(木製標本箱入り)。農学研究院・江頭和彦教授より。2008年2月7日受贈。

#### d. 昆虫コレクション

約2400箱。(故)大塚勲氏収集。2008年2月8日受贈。

#### e. 旧「日独友好協会」福岡支部所蔵フィルム

35点。言語文化研究院・福元圭太郎教授より。2008年4月11日受贈。

#### f. 昆虫標本 (テントウムシ・カメムシ・ガ類)

ドイツ型標本箱25箱・桐箱14箱。(故)村井省三氏収集。2008年9月25日受贈。

#### g. 日本産イラクサ科ヤブマオ属ほか植物さく葉標本

約4000点。東京大学大学院理学系研究科附属植物園・邑田仁園長より。2008年12月5日受贈。

#### h. 昆虫用標本箆筒

3棹。久留米大学医学部生物学教室・河内俊英氏より。2009年1月25日受贈。

i. 理科教育用生物標本

液浸瓶 40 本、頭蓋骨 1 点。高等教育開発研究センター・松本 顕助教より。2009 年 2 月 2 日受贈。

j. ホンドテン剥製標本

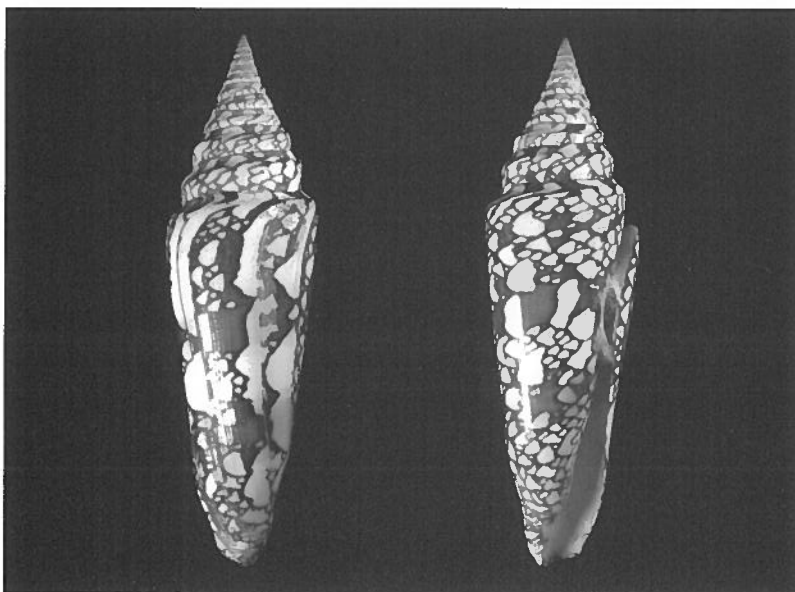
1 点。言語文化研究院・高橋 勤准教授より。2009 年 2 月 2 日受贈。

k. 考古学関係学術調査資料および書籍類

書架 70 棹文一括。(故)岡崎敬教授収集。2009 年 3 月 4 日受贈。

C. 標本整理・データベース化

2007 年度は九州大学間接経費（全学共通分）から 532 万円の配分を受け、博物館運営経費と併せて 632 万円、2008 年度は、九州大学間接経費（全学共通分）から 641 万円の配分を受け、博物館運営経費と併せて 741 万円の予算を組み、資料部を中心に標本整理・データベース化を行った。結果の一部は総合研究博物館のホームページ上に、「所蔵標本データベース」（総登録件数 33 万件）として公開した。



## 6. 社会貢献

### A. 公開講演会

#### 第9回公開講演会「鉱山遺跡を楽しもう」

日 時：2008年3月8日（土）13:00～16:30

会 場：50周年記念講堂4階大会議室

主 催：九州大学総合研究博物館

入場者数：79名

演 題：「歴史の中の鉱山」井澤英二（九州大学 名誉教授）

「金山の道標として一田舎の小さな博物館―」小松美鈴（甲斐黄金村・湯之奥金山博物館学芸員）

「ロボットによる石見銀山間歩探査―間歩内部映像から見た石見銀山の凄さ！―」久間英樹（松江工業高等専門学校 准教授）

#### 第10回公開講演会「植物の世界―お花畑から遺伝子まで―」

日 時：2008年11月29日（土）13:00～17:00

会 場：50周年記念講堂4階大会議室

主 催：九州大学総合研究博物館

入場者数：114名

演 題：「ウラジオストク植物紀行―対岸からみる日本列島の植物―」いがりまさし（植物写真家）「花と虫の出会い―送粉昆虫の訪花直前飛行の解析から―」川窪伸光（岐阜大学・准教授）

「植物の見かけの多様性、その背景にある遺伝子の変化」塚谷裕一（東京大学・教授）

### B. コミュニケーションミュージアム事業（九大糸島会・総合研究博物館）

九州大学を伊都キャンパスの地元で紹介し、地元の理解と支援を得るとともに、大学の教職員・学生が地元を知るために、地域資源再発見塾・会員交流事業・ふれあいバスツアーなどを継続的に行っている。

※2007年度

#### 第14回地域資源再発見塾

日 時：2007年10月20日（土）10:30～12:00

会 場：伊都文化会館

演 題：「環境に優しいエコ BEEF」後藤貴文（九州大学農学研究院 准教授）

#### 第15回地域資源再発見塾

日 時：2007年11月24日（土）13:30～15:00

会 場：二丈町立中央公民館

演 題：「農薬を正しく理解するために」桑野栄一（九州大学農学研究院 教授）

#### 第16回地域資源再発見塾

日 時：2008年2月9日（土）10:00～12:00

会 場：志摩町役場第2庁舎

演 題：「里山の現状と潜在力及び市民保全活動の展望」重松敏則（九州大学芸術工学研究院教授）  
「竹林拡大問題とその解決に向けた取り組み」藤井義久（九州芸術工科大学芸術工学研究院  
博士）

#### 第17回地域資源再発見塾

日 時：2008年2月16日（土）13:00～15:30

会 場：伊都文化会館調理室

演 題：「草木染を楽しもう」福原美恵子（九州大学総合研究博物館 研究支援推進員）

※2008年度

#### 第18回地域資源再発見塾

日 時：2008年7月26日（土）9:00～12:00

会 場：志摩町総合保健福祉センター「ふれあい」・志摩町健康管理センター体育館

演 題：「紙飛行機教室・飛行コンテスト」東野伸一郎（九州大学工学研究院 講師）

#### 第19回地域資源再発見塾

第1回

日 時：2009年1月31日（土）10:00～15:00

会 場：前原市大字瑞梅寺「ふるさと体験館のぞみ」

演 題：「『水の浄化材料としての竹炭』と炭焼き体験」久場隆広（九州大学工学研究院 准教授）

第2回

日 時：2009年2月21日（土）10:00～12:00

会 場：前原市大字瑞梅寺「ふるさと体験館のぞみ」

演 題：「『水の浄化材料としての竹炭』と炭焼き体験」久場隆広（九州大学工学研究院 准教授）

#### 会員交流事業（九州大学教職員と糸島一市二町職員の交流促進）

2007年度

日 時：2007年9月29日（土）11:00～13:00

会 場：志摩町新町

2008年度

日 時：2008年8月23日（土）11:00～13:00

会 場：志摩町新町

#### ふれあいバスツアー（新キャンパス見学，地域の再発見，大学と地元の交流）

2007年度

日 時：2007年11月10日（土）8:50～15:30

コース：芥屋大門公園⇒二見ヶ浦⇒九州大学伊都キャンパス

2008年度

日 時：2008年11月1日（土）8:30～15:30

コース：加茂ゆらりんこ橋⇒福ふくの里⇒福吉⇒九州大学伊都キャンパス

## Ⅳ. 専任教員の研究活動

岩永省三（いわなが しょうぞう）

Shozo IWANAGA

一次資料研究系・教授

### 《研究概要》

日本の弥生時代から8世紀に至る社会を主要な研究対象とし、以下の諸問題を研究している。①弥生時代青銅器の形態・機能上の特質の形成要因。②階級社会及び古代国家の形成過程に関する諸理論。③日本における階級社会・古代国家の形成過程の具体像および東アジア他地域との比較。④日本古代都城制の成立・変容の過程とその特質の成因。⑤都城の国家的施設の構造や機能からみた王権の特質。⑥仏像彫刻・瓦埴類の様式変遷とその歴史的背景。

### 《所属学会》

日本考古学協会，九州考古学会，木簡学会

### 《研究資金》

科学研究費・基盤研究（C）（2006～2009年度：代表）古墳時代の変容過程の研究

### 《学外委員等》

- ①. 春日市文化財専門委員会委員
- ②. 島根県古代文化センター客員研究員

### 《海外渡航》

2008.8.22-26. 大韓民国，九州考古学会・嶺南考古学会合同学会

### 《研究業績》

#### ＜原著論文＞

- ①. 岩永省三，2007. 段台状仏塔の構造と系譜. 史跡土塔一遺構編一，堺市教育委員会，760-84.
- ②. 岩永省三，2008. 内裏改作論. 九州大学総合研究博物館研究報告，6号，81-105.
- ③. 岩永省三，2008. 日本における都城制の受容と変容. 九州と東アジアの考古学—九州大学考古学研究室50周年記念論文集一，上巻，469-493.
- ④. 岩永省三，2009. 老司式・鴻臚館式軒瓦出現の背景. 九州大学総合研究博物館研究報告，7号，11-33.

#### ＜学会発表＞

- ①. 岩永省三，2008.12.13. 老司式Ⅰ式・鴻臚館Ⅰ式軒瓦出現の背景. 平成20年度九州史学会考古学部会，九州大学.

#### ＜講演等＞

- ①. 岩永省三，2007.11.11. 寺福堂銅戈と武器形青銅器祭祀. 小郡市平成19年度特別展記念講演会.
- ②. 岩永省三，2008.5.10. 平城宮の成立と変容. 下関市立考古博物館一般教養講座.

## 中牟田義博 (なかむた よしひろ)

Yoshihiro NAKAMUTA

一次資料研究系・准教授

### 《研究概要》

微小試料のX線回折法、顕微ラマン分光分析、電子顕微鏡などを用い、隕石中の微小鉱物の性質から初期太陽系の進化過程やその中に含まれる鉱物の生成メカニズムを解明する研究を行っている。また、このような微小試料の解析技術を生かし、装飾古墳中の顔料の分析、無機材料の評価などについても他分野との共同研究を行っている。隕石中の微小鉱物を用いた研究では、現在、以下のような具体的テーマに関して同時並行的に研究を進めている。

#### ①. ユレイライト隕石中のダイヤモンドの生成過程と生成条件

ユレイライト隕石中に含まれる微小炭素質鉱物のラマン分光分析を行うとともに、ガンドルフィカメラを用いた粉末X線回折パターンを得ることにより、その構造を精密に評価し、ダイヤモンドとそれに共生するグラファイトの性質から隕石中でのダイヤモンドの生成条件と生成過程を明らかにする。

#### ②. カンラン石の格子歪みによるコンドライト隕石の衝撃変成度の定量的評価

惑星同士の衝突は、太陽系初期における惑星形成の主要な駆動力となっている。本研究は隕石中に含まれるカンラン石の格子歪みを微小試料X線回折法により精密に決定し、惑星の衝突により引き起こされた衝撃変成作用を定量的に評価する。

#### ③. コンドライト隕石母天体の温度構造と形成過程

微小結晶のX線回折法をもとにした斜長石温度計により、コンドライト隕石の変成温度を推定し、初期太陽系におけるコンドライト隕石母天体の温度構造を明らかにし、その形成過程を検討している。

### 《所属学会》

日本鉱物科学会, 日本結晶学会, アメリカ鉱物学会, 隕石学会, 放射光学会, 日本粘土学会

### 《研究資金》

寄付金の受け入れ:

- ①. 無機結晶評価のための研究資金, 応用地質株式会社, 30 千円 (2007 年 4 月)
- ②. 無機結晶評価のための研究資金, 西日本技術開発株式会社, 250 千円 (2008 年 8 月)

### 《学外委員等》

- ①. 日本鉱物科学会 評議員, 2007 年 9 月~2008 年 9 月
- ②. 岩石鉱物科学 編集委員, 1995 年 9 月~現在

### 《研究業績》

#### <原著論文>

- ①. H. Mashima, J. Akai, Y. Nakamuta, S. Matsubara 2008. Orthorhombic polymorph of rengerite from Ohmi region, central Japan. *American Mineralogist*, Vol. 93, 1153-1157.

#### <学会発表>

- ①. Y. Nakamuta, 2007. Carbon minerals in the highly shocked Goalpara ureilite. The 31<sup>st</sup> Symposium on Antarctic Meteorites, NIPR, Tokyo.
- ②. 中牟田義博 2007. Formation mechanism of diamonds in the Goalpara ureilite. 日本鉱物科学会 2007 年度年会, 東京大学.

- ③. T. Aoki, Y. Nakamuta, and S. Toh 2007. Dislocation densities of olivine crystals structurally strained in variable degrees from a shocked chondrite. The 31<sup>st</sup> symposium on Antarctic Meteorites, NIPR, Tokyo.
- ④. 青木大空・中牟田義博 2007. Naryilco L/LL6 コンドライトの分類の検討. 日本鉱物科学会 2007 年度年会, 東京大学.
- ⑤. 堂込大介・中牟田義博 2007. NWA2129 CK3/4 コンドライト中の斜長石の化学組成分布と結晶化温度の推定. 日本鉱物科学会 2007 年度年会, 東京大学.
- ⑥. Y. Nakamuta 2008. In situ observation of diamond in ureilites by Raman spectroscopy. 71th Annual Meeting of the Meteoritical Society, 島根県松江市.
- ⑦. T. Aoki, Y. Nakamuta, S. Toh, T. Nakamura 2008. TEM observations of synthesized forsterite crystals after shock experiments. 71th Annual Meeting of the Meteoritical Society, 島根県松江市.
- ⑧. 中牟田義博 2008. 強い衝撃作用を受けた Goalpara ユレイライト隕石中のダイヤモンドの結晶構造. 日本鉱物科学会 2008 年度年会, 秋田大学 手形キャンパス.
- ⑨. 青木大空, 中牟田義博, 中村智樹, 藤昇一 2008. 衝撃回収フォルステライトの TEM 観察: とくに転位密度の圧力依存性について. 日本鉱物科学会 2008 年度年会, 秋田大学 手形キャンパス.
- ⑩. 関涼子, 中牟田義博, 武田弘 2008. TS072 ureilite 隕石中のダイヤモンドの産状と性質. 日本鉱物科学会 2008 年度年会, 秋田大学 手形キャンパス.

## 松隈明彦 (まつくま あきひこ)

Akihiko MATSUKUMA

分析技術開発系・教授

### 《研究概要》

- ①. 二枚貝綱の分類学的研究  
インド-西太平洋海域における Glycymerididae、Psammobiidae、Tellinidae、Chamidae、Veneridae 各科の種多様性とその起源、種分化のメカニズムを硬質部の形態形質と生物地理、および分子生物学的情報から検討する。
- ②. 西太平洋新生代二枚貝相の形成過程に関する研究  
日本産新生代二枚貝相の現生・化石生物地理学的研究から日本周辺海産二枚貝相の形成過程を明らかにする。
- ③. 逆転現象に基づく種分化の研究  
螺旋卵割の方向の逆転は正常個体と各器官の配置が鏡対称の逆転個体を作り出す。正常個体と逆転個体間に生殖的隔離が働く場合、逆転による種分化が予想される。Mytilidae、Chamidae を用いた新しい分類群の形成過程の研究を行う。
- ④. 日本産陸産貝類相の起源と移動に関する研究  
福岡県の陸産貝類相を記載し、その成立の過程を考察するとともに、環境の保全に基礎的データを提供する。
- ⑤. 外来性貝類相の起源に関する研究  
近年我が国に侵入した陸産貝類、特に *Rumina decollata*、の原産地国の推定、侵入方法、国内での拡散方法とスピード、生殖様式と侵入について植物検疫統計と分子生物学的情報から検討する。

### 《所属学会》

日本貝類学会 (副会長, 2001.1~), 日本古生物学会, Western Society of Malacologists (アメリカ)

### 《学外委員等》

- ①. 西宮市貝類館顧問, 2007.4.1-2008.3.31, 2008.4.1-2009.3.31

- ②. 西宮市貝類館運営委員, 2006. 11. 1-2007. 5. 31, 2007. 6. 1-2007. 10. 31, 2007. 11. 1-2008. 5. 31, 2008. 6. 1-2008. 10. 31, 2008. 11. 1-2009. 5. 31, 2009. 6. 1-2009. 10. 31
- ③. 福岡県希少野生生物保護検討会議委員, 2007. 9. 10-

#### ≪海外渡航≫

2009. 3. 8. -12.

Universiti Sains Malaysia, Penang, Malaysia

JSPS-NaGISA Bivalve Taxonomy Training Workshop, (二枚貝分類ワークショップの講師として出張)

#### ≪研究業績≫

##### <原著論文>

- ①. 高田大輔・松隈明彦, 2007. 日本産ヤマボタルガイの分子生物地理. 日本貝類学会平成19年度大会研究発表要旨集, 27.
- ②. 松隈明彦・武田悟史, 2009. 外来種オオクビキレガイ(軟体動物門腹足綱)の日本での分布状況と移動方法, 付録—農林水産省植物防疫所植物検疫統計—輸入植物検査病菌・害虫発見記録(1997-2007)の軟体動物. 九州大学総合研究博物館研究報告, no. 7, 35-84.

##### <著書>

- ①. 松隈明彦, 2009. 魚介類(貝類), 生態系の保全. 志摩町史自然編, 47-53, 62-66, 74.

##### <学会発表>

- ①. 松隈明彦・武田悟史, 2007. 4. 21. オオクビキレガイの日本への侵入と拡散. 日本貝類学会平成19年度大会, 豊橋市自然史博物館.
- ②. 高田大輔・松隈明彦・三島美佐子, 2007. 4. 22. 日本産ヤマボタルガイの分子生物地理. 日本貝類学会平成19年度大会, 豊橋市自然史博物館.
- ③. 松隈明彦, 2008. 4. 12. 植物検疫統計(1997-2006)の外来性貝類. 日本貝類学会年会創立80周年記念大会, 東京家政学院.
- ④. 氏野優・松隈明彦, 2008. 内生二枚貝の生息姿勢とその行動. 日本貝類学会2008年度年会, 東京家政学院.
- ⑤. 堀雅史・松隈明彦, 2008. 日本産キクザルガイ科二枚貝の分類学的再検討. 日本貝類学会2008年度年会, 東京家政学院.
- ⑥. 松隈明彦, 2008. 6. 5. 松本達郎名誉教授寄贈の地質学・古生物学関係文献. 第3回博物科学会, 大阪大学(豊中キャンパス).
- ⑦. 氏野優・松隈明彦, 2009. 1. 31. ニッコウガイ上科(Tellinoidea)二枚貝における生息姿勢の多様性とその進化生物学的意味. 日本古生物学会第158回例会, 琉球大学・沖縄県立博物館美術館.

##### <講演等>

- ①. 松隈明彦, 2007. 5. 19. 大学博物館はどこへ行くか. 東京能古会, 池袋簡保センター.
- ②. 松隈明彦, 2007. 9. 8. 貝類から見た糸島の自然. 志摩町町民大学, 志摩町総合保健福祉センター.
- ③. 松隈明彦, 2007. 9. 15. 糸島の自然と貝類. 阪神貝類談話会9月例会, 西宮浜公民館.
- ④. 松隈明彦, 2007. 10. 13. 地球温暖化と貝の外来種. 東京電力科学ゼミナール, 電力館(渋谷).
- ⑤. 松隈明彦, 2007. 11. 18. 貝の学名の語源と性. 阪神貝類談話会11月例会, 西宮浜公民館.
- ⑥. 松隈明彦, 2008. 10. 7-8. 地球温暖化と貝の外来種. 放送大学面接講義, 放送大学福岡校.
- ⑦. 松隈明彦, 2008. 7. 20. 市場で見られるパキスタン産マルスダレガイ科二枚貝. 阪神貝類談話会7月例会, 西宮浜公民館.
- ⑧. 松隈明彦, 2008. 10. 19. ウロコガイ超科の微小種. 阪神貝類談話会10月例会, 西宮浜公民館.

- ⑨. 松隈明彦, 2008. 12. 21. オオクビキレガイは1種か2種か. 阪神貝類談話会 12 月例会, 西宮浜公民館.

#### <新聞記事>

- ①. 松隈明彦, 2008. 6. 20. マンション計画地に希少貝. 読売新聞夕刊.

### 中西哲也 (なかにし てつや)

Tetsuya NAKANISHI

分析技術開発系・准教授

#### 《研究概要》

日本の鉱山技術史を、科学的データをもとに体系化するために、国内各地の主要鉱山について現地調査や、鉱石および製錬滓の採取／分析を行い、科学分析の結果を基に当時の製錬技術や採掘の対象となった鉱石について検証を試みている。また、江戸時代の銀貨である一分銀について、蛍光 X 線分析による非破壊定量分析を試み、分析法の確立と分析データの評価法について研究を進めている。

奈良の大仏に銅を供給したといわれる山口県長登銅山では、銅の生産が酸化銅鉱を原料とした製錬である事を明らかにし、銅製錬再現実験の学術的なサポートを行っている。研究成果の一部は平成 21 年 4 月に竣工する長登銅山文化交流館の展示に反映されている。

この他、福岡県香春銅山、鹿児島県国分銅山、宮崎県見立鉱山、槇峰銅山、島根県石見銀山、兵庫県生野銀山、明延鉱山、宮城県鹿折金山、涌谷町（砂金）などで現地調査を行い、鉱山資料の所在調査や、試料採取を行った。

#### 《所属学会》

資源地質学会, 資源・素材学会, 日本鉱業史研究会

#### 《研究資金》

P&P (2007～2008 年度: 分担) 九州大学博物館展示を利用した実践的研究～アウトリーチ活動のあり方と大人と子ども間の関わりを促すツール開発～

#### 《研究業績》

##### <原著論文>

- ①. 中西哲也, 2007. 江戸時代の鉱山に関するモノ資料の所在. 日本鉱業史研究, No.54, 68-73.
- ②. 中西哲也, 2007. 日本の前近代の鉱山と関連資料. 考古学ジャーナル, 562 号, 40-41.
- ③. 中西哲也, 2007. 鉱山古文書に見る山師の探査技術. 資源・素材学会 2007 年秋期大会講演集, 197-198.
- ④. 中西哲也, 2008. 鹿児島県国分銅山の製錬滓についての予察的研究. 資源・素材学会 2008 年春期大会講演集, 97-98.
- ⑤. 大石徹・鳥越俊行・中西哲也・大串融, 2008. 石見銀山の福石鉱床について (その 1). 日本鉱業史研究, No.56, 45-64.
- ⑥. 中西哲也, 2008. 蛍光 X 線分析による古銭の定量分析. 資源・素材学会 2008 年秋期大会講演集, 127-128.
- ⑦. 中西哲也, 2009. 宮崎県日之影町見立鉱山の旧採掘跡について. 資源・素材学会 2009 年春季大会講演集, 95-96.

### <学会発表>

- ①. 中西哲也, 2007. 鉾山古文書に見る山師の探鉾技術. 資源・素材学会.
- ②. 中西哲也, 2008. 鹿児島県国分銅山の製錬滓についての予察的研究. 資源・素材学会.
- ③. 中西哲也, 2008. 蛍光 X 線分析による古銭の定量分析. 資源・素材学会.
- ④. 中西哲也, 2009. 宮崎県日之影町見立鉾山の旧採掘跡について. 資源・素材学会.

### 宮崎克則 (みやざき かつのり)

Katsunori MIYAZAKI

開示研究系・准教授

#### <<研究概要>>

文献史料・口頭伝説・記念碑などを利用し、近世日本の民衆文化論を研究する。最近はシーボルト「NIPPON」の書誌学的研究を行っている。また、画像データの管理システムの開発とともに、学術資料の目録データの横断検索システムを開発し運用している。

#### <<所属学会>>

洋学史学会, 日本史研究会, 九州史学研究会

#### <<研究資金>>

科学研究費・基盤研究 (C) (2008～2010 年度: 代表) 「シーボルトが集めた『博物』資料のデジタル再構築」

#### <<学外委員等>>

- ①. 福岡市史編纂委員
- ②. 佐賀県東松浦郡玄海町文化財保護委員

#### <<海外渡航>>

- ①. 2007 年 8 月 29 日～9 月 30 日  
スイス・チューリッヒ大学, ドイツ・ボフム大学, オランダ・ライデン大学  
ヨーロッパのシーボルト・コレクション調査ースイス・ドイツ・オランダー
- ②. 2008 年 8 月 30 日～10 月 6 日  
ドイツ・ボフム大学, オランダ・ライデン大学, フランス・パリ国立図書館  
ヨーロッパのシーボルト・コレクション調査ードイツ・オランダ・フランスー
- ③. 2008 年 12 月 2 日～12 月 12 日  
ロシア・サンクトペテルブルグ クンストカメラ (国立民族学博物館)  
ロシアにある江戸時代の日本風俗画の調査

#### <<研究業績>>

##### <原著論文>

- ①. 宮崎克則, 2008. シーボルト『NIPPON』のフランス語版. 九州大学総合研究博物館研究報告, 6 号, 1-32.
- ②. 宮崎克則, 2009. シーボルト『NIPPON』の捕鯨図. 九州大学総合研究博物館研究報告, 7 号, 85-103.

##### <著 書>

- ①. 宮崎克則, 2009. 九州の一揆・打ちこわし. 海鳥社, 1-372.

### <学会発表>

- ①. 宮崎克則, 2009.3.28-29. シーボルト「NIPPON」のロシア語版. 洋学史学会・実業史研究会合同京都大会, 京都大学.

### <講演等>

- ①. 宮崎克則, 2007.7.14-15. シーボルトが描いた日本の捕鯨. 立教大学日本学研究所主催 国際シンポジウムー捕鯨を通して見る世界Ⅲー, 立教大学 (東京).
- ②. 宮崎克則, 2007.11.14. 古地図で歩く福岡・博多. 福岡県立図書館読書週間事業 郷土史講座, 福岡県立図書館

## 三島美佐子 (みしま みさこ)

Misako MISHIMA

開示研究系・助教

### <<研究概要>>

#### ①. ゴール形状多様化の機構解明

ゴールの形状は非常に多様化しており、そのような形状がどのように決定・形成され、また進化してきたのかを明らかにしようとしている。

#### ②. 植物の倍数性進化と種分化

バラ科キイチゴ属、ワレモコウ属、イラクサ科サンショウソウ属などを用い、交雑や倍数化を伴う種分化研究と生物地理学的研究を行っている。

#### ③. 大学博物館のあり方に関する研究：アウトリーチ、科学コミュニケーション、展示評価、バックヤード、感性などをキーワードとして、観察と実践調査に基づき、大学博物館のあり方と、博物館における「感性」のあり方を探る。

### <<所属学会>>

日本進化学会, 日本植物学会, 日本植物分類学会, (財)染色体学会, 種生物学会, 植物地理分類学会, 日本植生史学会, 日本昆虫学会

### <<研究資金>>

#### <学外資金>

- ①. 平成 18 年度財団法人九州大学後援会教員の研究プロジェクト助成事業 (2006 年度: 代表) 「虫えい形状の進化ー寄主植物の種分化と地理的変遷からのアプローチー」
- ②. 財団法人平和中島財団 2007 (平成 19 年度) アジア地域重点学術研究助成 (2007 年度: 代表) 「日本と中国に共通するタマバエ類とその種分化」

#### <学内資金>

- ①. 九州大学教育研究プログラム・研究拠点形成プロジェクト (2003-2006 年度: 分担) 「生物多様性の保全と進化に関する研究拠点形成 (代表: 矢原徹一)」
- ②. 九州大学教育研究プログラム・研究拠点形成プロジェクト (2007-2008 年度: 代表) 「九州大学博物館展示を利用した実践的研究」

### <<研究業績>>

#### <原著論文>

- ①. S.Sato,T.Ganaha,J.Yukawa,Y.Liu,J-C.Paik,N.Uechi and M.Mishima,2009. A new species of the

genus *Rhopalomyia* (Diptera:Cecidomyiidae) inducing large galls on wild and cultivated *Chrysanthemum* (Asteraceae) in China and on Jeju Island, Korea. *Applied Entomology and Zoology*, 44 (1), p.61-72.

#### <その他>

- ①. 三島美佐子, 2007. ムシできない話・その2. 日本植物分類学会ニュースレターNo. 25, p.19.
- ②. 三島美佐子, 2007. P&P 研究費の獲得. 九州大学総合研究博物館ニュース, No.9, p.3.
- ③. 三島美佐子・中西哲也, 2007. 2007年度公開展示「わくわくドキドキ化石のヒミツー化石が語る地球の環境へ」ー第二回少年科学文化会館・九州大学総合研究博物館合同企画展のご報告ー. 九州大学総合研究博物館ニュース, No.9, p.2.
- ④. 三島美佐子, 2007. 九州大学のハーバリウムと所蔵標本のご紹介. 日本植物分類学会ニュースレター, No.27, p.14-16.
- ⑤. 三島美佐子, 2008. 常設展示室へようこそ: その1 「九大博物館標本かるた」うらばなし. 九州大学総合研究博物館ニュース, No.11, p.2-3.
- ⑥. 三島美佐子, 2009. 常設展示室へようこそ: その5 九大博物館展示室を利用したワークショップ①. 九州大学総合研究博物館ニュース, No.12, p.2-3.

### 丸山宗利 (まるやま むねとし)

Munetoshi MARUYAMA

開示研究系・助教

#### 《研究概要》

おもにアリと共生する昆虫の分類と系統に関する研究を行っている。また、非常に分類の困難なヒゲブトハネカクシ亜科の高次系統関係、日本各地で絶滅の危機に瀕している潮間帯性甲虫の分類と分布調査、きわめて豊かな多様性を誇る東南アジアの熱帯雨林の昆虫調査などを手掛けている。

#### 《所属学会》

日本進化学会, 日本生態学会, 日本昆虫学会, 日本動物分類学会, 日本生物地理学会, 日本甲虫学会, 日本鞘翅学会, ウィーン甲虫学会, 日本蟻類研究会, 日本直翅目研究会, コガネムシ研究会, 水生昆虫談話会, ハネカクシ談話会等

#### 《研究資金》

科学研究費・若手スタートアップ (2008~2009年度: 代表) 「ヒゲブトハネカクシ亜科の高次体系に基づく好蟻性種の分類と進化」

#### 《学外委員等》

日本蟻類研究会 編集委員長, 2003年~

#### 《海外渡航》

- ①. 2008年7月22日~8月1日  
マレーシア・ランビル国立公園 (ワラワク州) における好蟻性昆虫の調査
- ②. 2009年2月15日~3月1日  
エクアドル (ナポ州) における好蟻性昆虫の調査と NHK テレビ撮影の監修
- ③. 2009年3月7日~16日  
マレーシア・ウル=ゴンバッツ (セランゴール州) における好蟻性昆虫とアリの調査

## 《研究業績》

### <原著論文>

- ①. M. Maruyama, J. Klimaszewski and V. Gusarov, 2008. *Osakatheta yasukoae*, a new intertidal genus and species of athetine rove beetles (Coleoptera, Staphylinidae, Aleocharinae) from Japan. *Zootaxa*, 1683: 39–50.
- ②. M. Maruyama, B. L. Patrick and J. Klimaszewski, 2008. First record of the genus *Myrmedonota* Cameron (Coleoptera, Staphylinidae) from North America, with descriptions of two new species. *Zootaxa*, 1716: 35–43.
- ③. M. Maruyama, R. H. L. Disney, 2008. Scuttle flies associated with Old World army ants in Malaysia (Diptera: Phoridae; Hymenoptera: Formicidae, Dorylinae). *Sociobiology*, 51(1): 65–71.
- ④. T. Komatsu and M. Maruyama, 2008. Symbiotic host of *Triartiger reductus* Nomura (Coleoptera, Staphylinidae, Pselaphidae, Clavigeritae) in the island of Tsushima, Japan. *Elytra*, 36(1): 227–228.
- ⑤. M. Maruyama, F. M. Steiner, C. Stauffer, T. Akino, R. H. Crozier and B. C. Schlick–Steiner, 2008. A DNA and morphology based phylogenetic framework of the ant genus *Lasius* with hypotheses for the evolution of social parasitism and fungiculture. *BMC Evolutionary Biology*, 2008, 8: 237.
- ⑥. M. Maruyama, H. R. L. Disney and R. Hashim, 2008. Three new species of legless, wingless scuttle flies (Diptera: Phoridae) associated with army ants (Hymenoptera: Formicidae) in Malaysia. *Sociobiology*, 52(3): 485–496.
- ⑦. T. Komatsu, M. Maruyama, S. Ueda and T. Itino, 2008. mtDNA phylogeny of Japanese ant crickets (Orthoptera: Myrmecophilidae): diversification in host specificity and habitat use. *Sociobiology*, 52(3): 553–565
- ⑧. M. Maruyama, Y. Katayama, W. Sakchoowong and S. Nomura, 2008. First record of *Lebioderus* (Coleoptera, Carabidae, Paussinae) from the Indochinese Peninsula, with description of a new species. *Esakia*, (48): 47–49.
- ⑨. M. Maruyama, 2008. *Giraffaenictus eguchii* (Coleoptera, Staphylinidae, Aleocharinae), a new genus and species of fully myrmecoid myrmecophile from a colony of *Aenictus binghami* (Hymenoptera, Formicidae, Aenictinae) in Vietnam. *Esakia*, (48): 51–56.

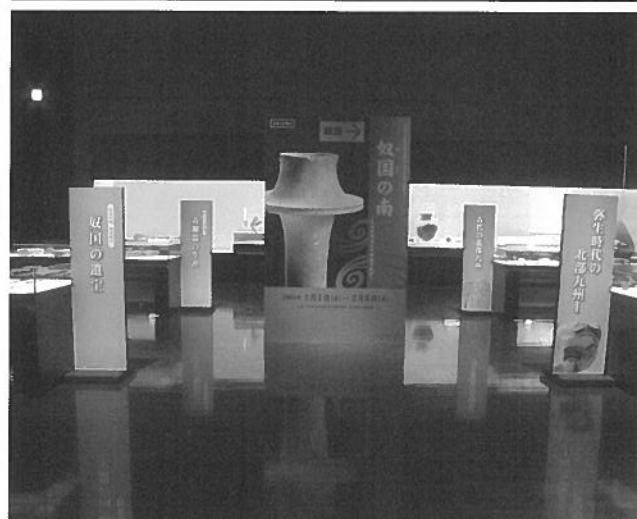
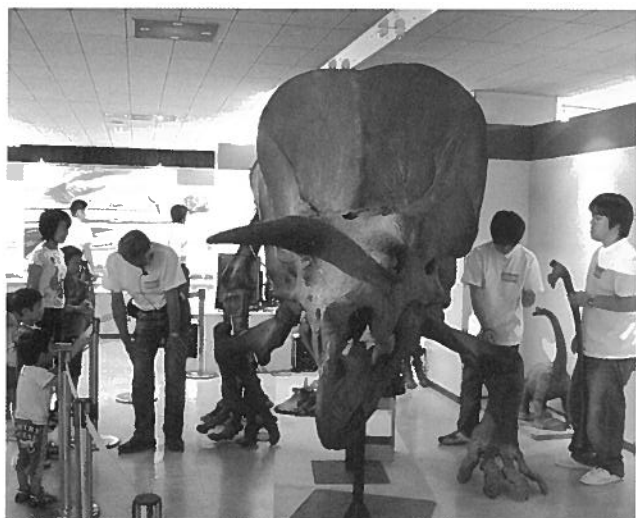
### <学会発表>

- ①. 小松貴・丸山宗利・市野隆雄, 2008. 寄主アリ及びハビタット特異性からみた好犠牲昆虫アリヅカコオロギ属 *Myrmecophilus* の分子系統. 日本生態学会第 55 回全国大会, 福岡.
- ②. 丸山宗利・秋野順治・Rosli Hashim・小松貴, 2008. ヒメサスライアリに多様化した好犠牲昆虫の形態・行動・体表炭化水素. 日本生態学会第 55 回全国大会, 福岡.
- ③. 丸山宗利, 2008. 好犠牲昆虫の形態進化の可塑性と寄主への適応. 日本進化学会第 10 回大会, 札幌.
- ④. 丸山宗利・Florian M. Steiner・Birgit C. Schlick–Steiner・秋野順治・升屋勇人・濱口京子・坂本洋典, 2008. ケアリ属 *Lasius* (ハチ目: アリ科) における社会寄生・菌共生・形態の進化. 日本昆虫学会第 68 回大会, 高松.
- ⑤. 小松貴・丸山宗利・市野隆雄, 2008. アリヅカコオロギ属 *Myrmecophilus* (バッタ目: アリヅカコオロギ科) におけるスペシャリスト種とジェネラリスト種の寄主アリ巣内での行動および生存の違い. 日本昆虫学会第 68 回大会, 高松.

- ⑥. 丸山宗利・秋野順治・小松貴, 2008. ヒメサスライアリ属3種の好蟻性昆虫群集における形態・行動の多様性と体表炭化水素. 日本昆虫学会第68回大会, 高松.
- ⑦. 須島充昭・丸山宗利・小松貴, 2008. 好白蟻性クロバネキノコバエ (*Pnyxiopalpus* sp.) の発見とその特異な生態. 日本昆虫学会第68回大会, 高松.
- ⑧. 丸山宗利・小松貴・R. Henry L. Disney, 2008. シロアリノミバエ亜科(仮称) Termitoxeniinaeの日本からの発見. 日本鞘翅学会第21回大会・日本甲虫学会2008年次大会・日本昆虫分類学会第11回大会, 松山.
- ⑨. 小松貴・丸山宗利・市野隆雄, 2009. アリヅカコオロギ属内におけるスペシャリスト種とジェネラリスト種: 寄主アリに対する行動の違い. 日本生態学会第56回全国大会, 盛岡.
- ⑩. 遠藤真太郎・丸山宗利・市野隆雄, 2009. クサアリ亜属5種の形態分類とCHC組成の比較. 日本生態学会第56回全国大会, 盛岡.

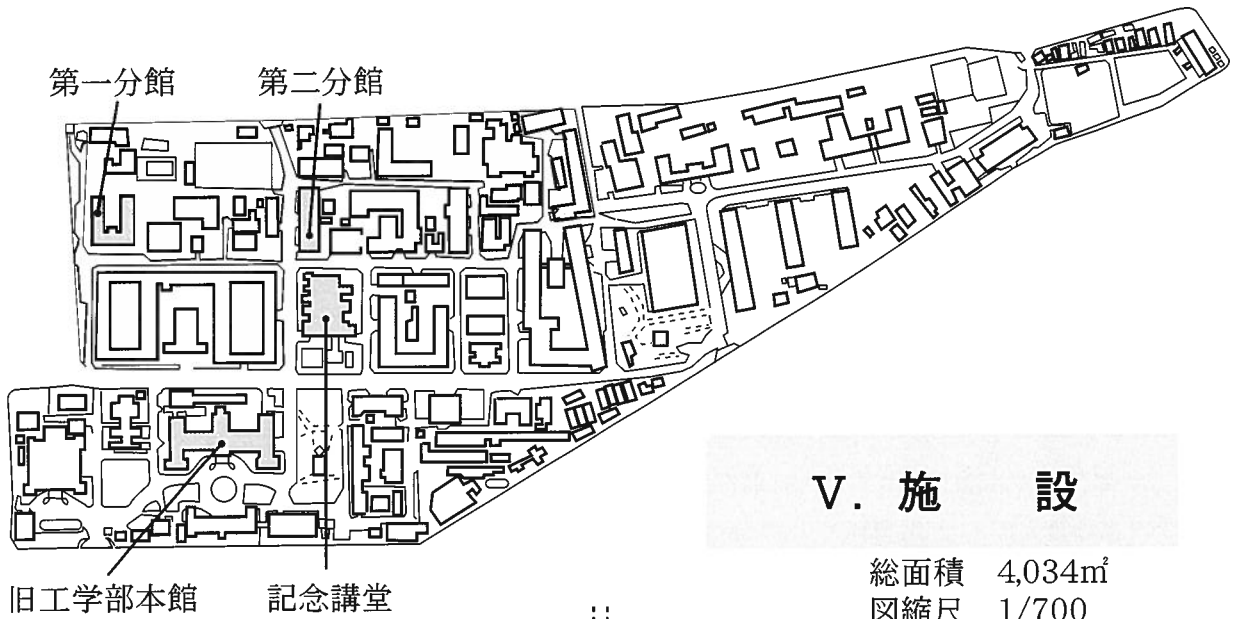
<講演等>

- ①. 丸山宗利, 2008. 11. 29. 日本の海岸線の甲虫. シンポジウム “海と陸の間: 日本の命があふれるところ” 札幌.



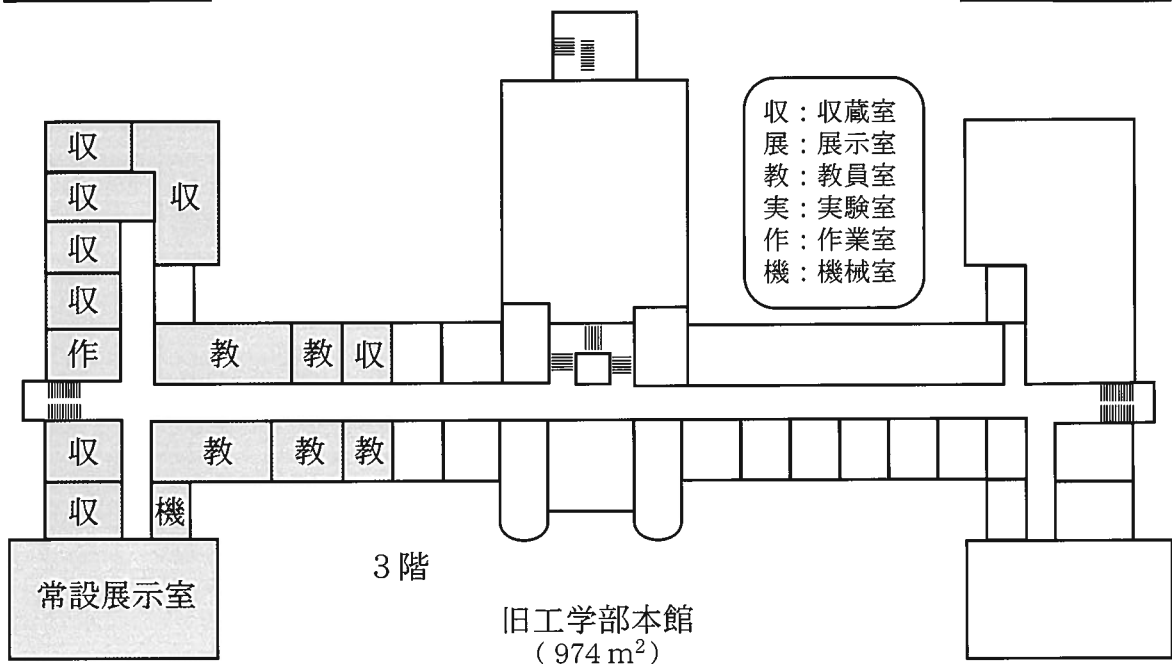
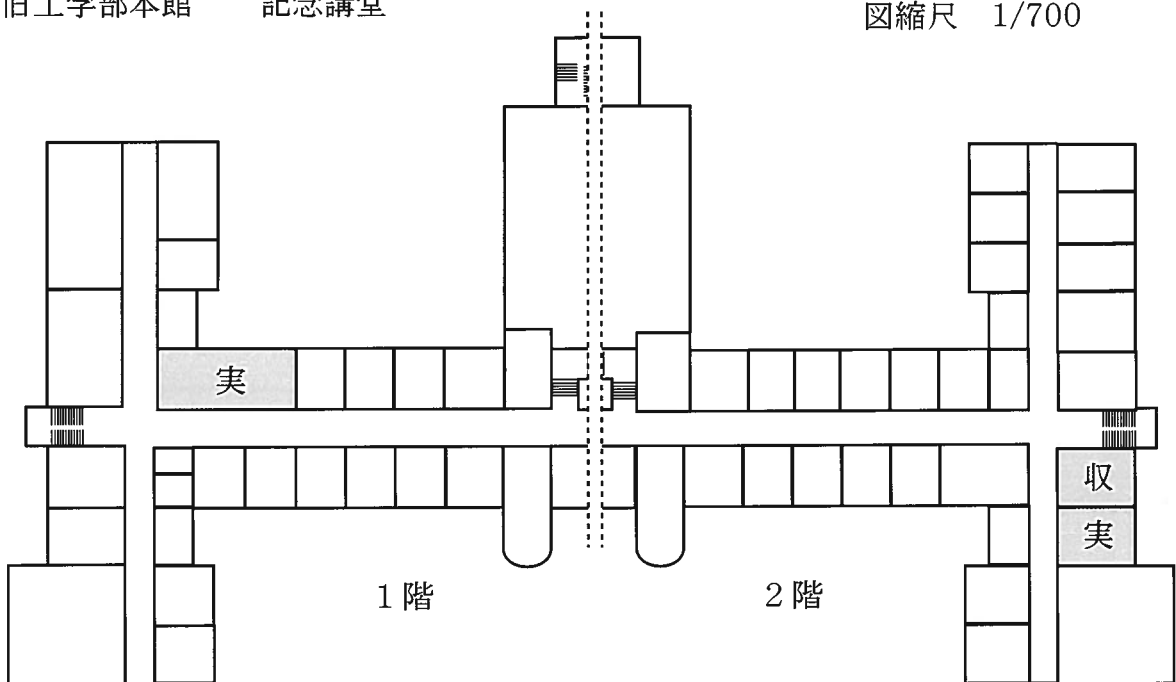
第9回公開展示  
「わくわくどきどき化石のヒミツ」

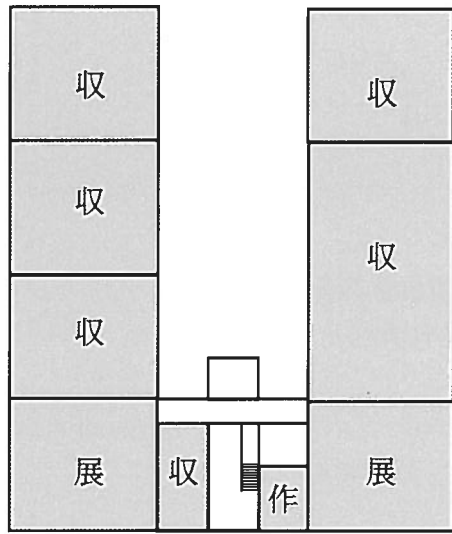
第10回公開展示  
「奴国の南」



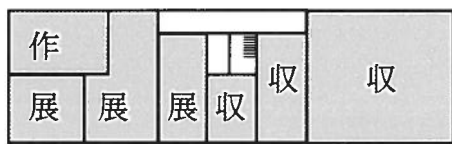
## V. 施 設

総面積 4,034㎡  
 図縮尺 1/700



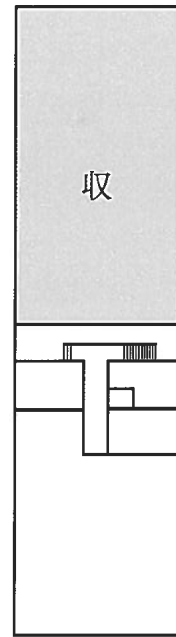


1階

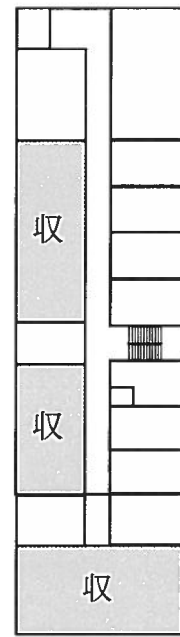


2階

第一分館  
(1960 m<sup>2</sup>)

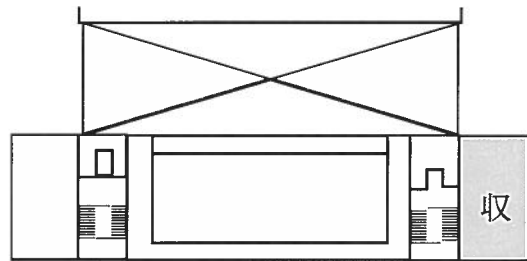


1階



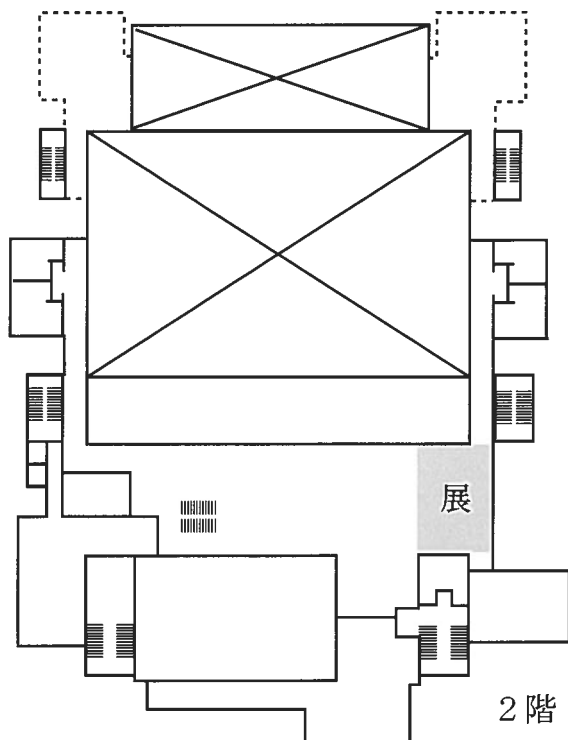
2階

第二分館  
(791 m<sup>2</sup>)

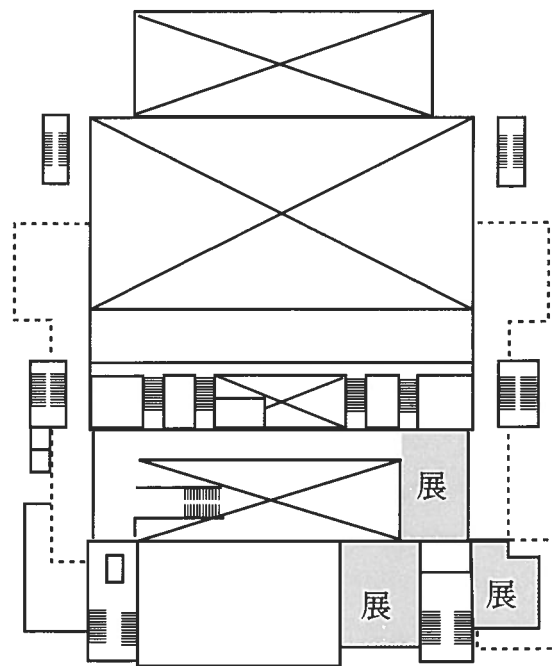


4階

記念講堂  
(309 m<sup>2</sup>)



2階



3階

## VI. 規 則

### 九州大学総合研究博物館規則

(平成 19 年 5 月 17 日制定)

#### 第 1 条 (趣 旨)

この規則は、九州大学学則（平成 16 年度九大規則第 1 号。以下「学則」という。）題 13 条第 2 項の規定に基づき、総合研究博物館（以下「博物館」という。）の内部組織その他必要な事項を定めるものとする。

#### 第 2 条 (目 的)

博物館は、学術標本の収蔵、分析、展示・公開等及び学術標本に関する研究教育の支援並びにこれらに関する調査研究を行うとともに、学内外の研究教育活動に寄与することを目的とする。

#### 第 3 条 (館 長)

学則第 26 条の規定により、博物館に、館長を置く。

- 2 館長は、九州大学の教授のうちから第 5 条に規定する運営委員会の推薦により、総長が任命する。
- 3 館長の任期は、2 年とする。ただし、欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。
- 4 館長は再任されることができる。ただし、引き続き再任される場合は、一回を限度とする。

#### 第 4 条 (副館長)

学則第 26 条の規定により、博物館に、副館長を置く。

- 2 副館長は、博物館の専任の教授及び助教授のうちから館長の推薦により、総長が任命する。
- 3 副館長の任期は、2 年とする。ただし、当該副館長への就任時における館長の任期の終期を越えることはできない。
- 4 副館長は、再任されることができる。

#### 第 5 条 (運営委員会)

学則第 39 条の規定により、博物館に、博物館の重要事項を審議するため、運営委員会を置く。

2 運営委員会は、次の各項に掲げる事項を審議する。

- (1) 館長および副館長の選考に関する事。
- (2) 博物館の教員人事に関する事。
- (3) 教員の研究業務に係る重要事項に関する事。
- (4) 共同利用に係る業務の重要事項に関する事。
- (5) 研究員等に関する事。
- (6) 研究生等に関する事。
- (7) 博物館内の諸規則等の制定改廃に関する事。
- (8) 博物館の自己点検・評価に関する事。
- (9) その他博物館の管理運営に関する事。

3 前項第 2 号に掲げる事項のうち、教員の選考のための資格審査については、原則として、博物館に設置する教員選考委員会において行うものとする。ただし、必要に応じて、博物館の教育研究に係る部局の教授会において行うことができる。

第 6 条 運営委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

- (1) 総長が指名する副学長

- (2) 館長及び副館長
- (3) 博物館の専任の教授及び准教授（副館長の職にある者を除く。）
- (4) 附属図書館長
- (5) 情報基盤センター長
- (6) 各研究院の教授及び准教授のうちから選ばれた者 各一人
- (7) 各附属研究所の教授及び准教授のうちから選ばれた者 各一人
- (8) 理学部等事務長
- (9) その他運営委員会が必要と認めた者 若干人

2 前項第6号、第7号及び第9号の委員の任期は、2年とする。ただし、委員に欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

3 前項の委員は、再任されることができる。

第7条 運営委員会に委員長を置き、館長をもって充てる。

2 委員長は、運営委員会を主宰する。

3 運営委員会に、副委員長を置き、副館長をもって充てる。

4 副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故があるときは、その職務を代行する。

第8条 運営委員会は、委員の2分の1以上が出席しなければ議事を開き、議決することができない。

2 運営委員会の議事は、出席した委員の過半数で決し、可否同数のときは、委員長の決するところによる。

第9条（専門委員会）

運営委員会に、専門的事項を審議するため、必要に応じて、専門委員会を置くことができる。

第10条（兼任の教員）

博物館に、兼任の教員を置くことができる。

2 兼任の教員は、九州大学の教員のうちから運営委員会の推薦により、総長が任命する。

3 兼任の教員の任期は、2年とし、再任を妨げない。

第11条（事務）

博物館に関する事務は、当分の間、理学部等事務部において処理する。

第12条（雑則）

この規則に定めるもののほか、博物館の組織及び運営に関し必要な事項は、運営委員会の議を経て、館長が定める。

附 則

1 この規則は、平成16年4月1日から施行する。

2 この規則の施行後、最初に任命される館長及び運営委員会の委員は、この規則の相当規定に基づき任命されたものと見なす。

3 この規則の施行の際現に九州大学総合研究博物館規則（平成12年4月1日施行。以下「旧規則」という。）の規定に基づき、兼任の教員に任命されている者は、この規則の相当規定に基づき任命されたものとみなし、その任期は旧規則による兼任の教員として在任した期間を控除した期間とする。

附 則

この規則は、平成19年4月1日から施行する。

## 九州大学総合研究博物館の教員組織に関する内規

### 第1条 (趣旨)

この内規は、九州大学総合研究博物館（以下「博物館」という。）の教員組織に関し必要な事項を定めるものとする。

### 第2条 (教員組織)

博物館に、教員組織として次の表の左欄に掲げる系を置き、当該系の任務は、同表の右欄に定めるとおりとする。

系	任 務
一次資料 研究系	学術標本の調査・収集、分類・保存及びその理論・方法に関する研究と教育
分析技術 開発系	学術標本の先端的分析法による新たな学術情報の抽出及びその理論・方法に関する研究と教育
開 示 研究系	学術標本の展示・公開のための情報のデータベース化及びその効果的な展示・公開のための理論・方法の研究と教育

### 附 則

この内規は、平成19年度4月1日から施行する。

## 九州大学総合研究博物館資料部内規

第1条 九州大学総合研究博物館に、学術標本の管理、運用にあたる資料部を置く。

第2条 資料部は専任教員及び兼任教員で構成される。

第3条 資料部に自然史、文化史、技術史の3部門を置き、各部門に専門分野を置く。

2 専門分野は当分の間、以下のとおりとする。

自然史部門：動物・医動物、植物、昆虫、水生生物、地史古生物、岩石、鉱物、人類先史、有機化石、地球電磁気、生薬

文化史部門：考古、記録史料、建築史

技術史部門：資源・素材、機械

第4条 各専門分野に分野主任を置く。

2 分野主任は、当該分野に関係のある兼任教員をもって充てる。なお、必要に応じて博物館の専任教員も分野主任となることができる。

3 分野主任の選出は、各分野の推薦に基づき、館長が委嘱する。

4 分野主任は館長の下に、各分野における学術標本の管理、運用の取りまとめを行う。

5 分野主任の任期は2年とし、補欠の任期は前任者の残任期とする。なお、再任を妨げない。

第5条 博物館に学術標本の管理・運用に関わる諸事項および各分野の連絡調整を計るため、主任会議を置く。

2 主任会議は各分野主任および博物館専任教員をもって構成する。

3 館長は主任会議を招集し、その議長となる。

### 附 則

1 この内規は、平成16年4月1日から施行する。

2 この内規施行後最初に任命される分野主任の任期は、第4条第5項の規定に関わらず、平成18年3月31日までとする。

### 附 則

この内規は、平成16年11月22日から施行する。

## 九州大学総合研究博物館フィールド・ミュージアム部内規

第1条 九州大学総合研究博物館に、野外における教育・研修支援のためにフィールド・ミュージアム部を置く。

第2条 フィールド・ミュージアム部は専任教員及び兼任教員で構成される。

第3条 フィールド・ミュージアム部に陸生生物、水生生物及び地学の3部門を置く。

第4条 各部門に部門主任を置く。

2 部門主任は、当該部門に関係のある兼任教員をもって充てる。なお、必要に応じて博物館の専任教員も部門主任となることができる。

3 部門主任の選出は、各部門の推薦に基づき、館長が委嘱する。

4 部門主任は館長の下に、各部門における野外における教育・研修支援の取りまとめを行う。

5 部門主任の任期は2年とし、補欠の任期は前任者の残任期とする。なお、再任を妨げない。

第5条 博物館に野外における教育・研究支援に関わる諸事項および各部門間の連絡調整を計るため、主任会議を置く。

2 主任会議は各部門主任および博物館専任教員をもって構成する。

3 館長は主任会議を招集し、その議長となる。

附 則

1 この内規は、平成16年4月1日から施行する。

2 この内規施行後最初に任命される分野主任の任期は、第4条第5項の規定に関わらず、平成18年3月31日までとする。



九州大学総合研究博物館年報  
Annual Report of the Kyushu University Museum  
第3号  
2007—2008年度

2009.9.30 発行

編集・発行 九州大学総合研究博物館 The Kyushu University Museum  
〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1 6-10-1, Hakozaki, Higashi-ku, Fukuoka, 812-8581, Japan  
Phone/Fax 092-642-4252  
URL <http://www.museum.kyushu-u.ac.jp>

印刷 株式会社ミドリ印刷  
〒812-0857 福岡市博多区西月隈1-2-11  
Phone 092-441-6747  
Fax 092-473-1275

